
木の葉のワンコ娘

冬山 楽

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

木の葉のワンコ娘

【Nコード】

N9655Z

【作者名】

冬山 楽

【あらすじ】

犬塚家の次女が木の葉の里で頑張るお話し。

恋愛したりバトルしたりと大暴れ！！

シカマルに想いを寄せるブラコン姉さん、いざ参る！！

木の葉のワンコ娘（ストーリー、キャラ設定）

この小説は、原作沿い＋オリジナルの設定の夢小説です。

シカマル落ちです。

主人公以外の恋愛要素もあります。

最初はオリジナルから入り、原作は一部の中忍試験開始から始まります。

次は夢主& amp ; オリキャラ紹介です！！（話が進むとキャラの追加や設定の追加があります）

主人公

「犬塚ミミ」

犬塚家の次女でキバの一つ上の姉。

家族を大切にしている。

母や姉、忍犬達も好きだが、一番はキバ。

キバ大好きな超がつくほどのブラコン。

明るくて優しい性格。（ただし、弟が傷つけられたりするとかなり怖い）

小さい子に好かれやすい。

愛犬（忍犬）は、赤丸と同じサイズの柴犬、『茶々丸』。

ネジ達の同期。

実は下ネタが苦手。

シカマルのことが好き。
戦闘スタイルは基本的にキバと同じ。

「水鳥シミズ」

ミミと同じチーム。

毒舌ドSな性格。

初対面だろうが年上だろうが容赦ない。

カノンを虐める（弄る）のが好き。

冷たいように見えるが、実は結構仲間思い。

ミミとカノン、ヤイバは、かけがえのない存在。

意外にも甘い物が好き。

戦闘スタイルは、水遁と毒を使う。

「火塚カノン」

ミミと同じチーム。

ヤイバ班のツッコミ役で苦勞人。

ミミのブラコンや、シミズの毒舌に振り回されたり、厄介事に巻き

込まれたりなど、不憫体質。

ヒナタに想いを寄せている。

リーとは仲の良い友達で良きライバル。

戦闘スタイルは、火遁と体術を得意とする。

「ヤイバ」

ミミ達の担当上忍。

寝ることが好きで、どの時間帯でもどの場所でも基本的に寝れる。

普段は温厚で、怒ることも少ないのだが、睡眠を邪魔されるとブチギれる。

カカシの後輩。

戦闘スタイルは、刀を武器として戦う。

実力は今の所不明…。

先程あげたように、ストーリーが進むと、キャラが増えることがあるので、増えたら新しくキャラ設定を追加するのでよろしくお願ひします！

それから、この小説は一応、一部で終わる予定です。

もし、二部の方も書いてという要望があった場合は、作るうかと考えています。

ですが基本的には一部設定のまま終了する予定です。

では次からお話しに入っていきます!!

第1話「犬塚家のお姉ちゃん」

火の国、木の葉隠れの里のとある家…

「お母さん！ハナ姉さん！」

バタバタと階段から降りてくる少女に二人はため息をつく。

「あんたの言いたいことは分かってるよ。アカデミーの卒業試験のことだろう？」

母のツメがそう言うと、少女はビシッ！と指をさす。

「そう！今日はアカデミーの卒業試験！！愛しのマイブラザーがついに下忍になる日だよー！！」

「まだ卒業するとは決まっていなくてしょー」

「そんなことないよ！！キバは絶対受かるわー！！」

そう言うと少女はムカつくくらいのだや顔を披露する。
そんな少女に柴犬が足元にスリスリとすりよってきた。

「キバがもうすぐ私と同じ下忍…あーっ楽しみ！！ねえ、茶々丸
！！」

「ワン！」

「ほら、いつまでもはしゃいでないでさっさと着替えてご飯食べなさい、ミミ」

「はいー！」

先程から騒がしいこの少女：彼女の名は犬塚 ミミ。

犬塚家の次女で、立派な下忍だ。

彼女の側にいる柴犬の名は茶々丸。

彼女の愛犬だ。

なぜ彼女がこんな朝っぱらから騒がしいのか：その原因は弟のキバがアカデミーの卒業試験を受ける日だからだ。

忍者アカデミー前

「キーーバーーーーー！！！！」

卒業生とその家族が集まる中、ミミは愛しの弟を見つけると素晴らしいスピードで弟に近づき、思いつきり抱き締める「

「うわっ！ミミ姉ちゃん！！」

「卒業おめでとー！！キバはやっぱりお姉ちゃんの自慢の弟だよ！」

キバの額につけられた木の葉のマークがついた額宛を見て嬉しそうに言う。

「あつたりまえだ！！俺もこれから姉ちゃんと同じ下忍だぜ！」

ミミに褒められ、ニカリと笑いながらキバは言う。

(ああああ！！可愛いキバ、ホントに可愛い…！！)

そんなキバにミミは内心暴走気味だった。(オイ

ピクリ…

「……………」

「姉ちゃん…?」

「キバ、後でお姉ちゃんと茶々丸達の散歩しようか」

「よっしやー！…！」

「あっちにお母さんとハナ姉さんがいるから行って卒業したって報告してきなさい」

「おう！」

そう言ってキバはミミが指さした方向へ走って行った。

「…さてと」

キバを見送ったミミはある人物の場所へ走って行く。

「アカデミー合格おめでとう、シカマル」

「…ああ」

父のシカクに言われ、少しきだるそつに返事するシカマル。
するど…

「シカマルー！ー！」

「うおっ？！ー！」

シカマルの背中にタックルしてきたのは先程キバと一緒にいたミミだ。

「シカマルもアカデミー卒業したんだね！おめでとうー！ー！」

「み…ミミ？！」

自分にタツクルしてきた人物を見て驚くシカマル。

「やあ、ミミちゃん。相変わらず元気だね」

「シカマルのお父さん！こんにちは！！」

「…何しにきた…って、どうせキバのことだろ…」

「もちろん！！」

胸を張って何故か威張るように言うミミにシカマルはため息をつく。

「もー何ため息ついてんの！！幸せが逃げちゃうよ？」

「頭撫でんな」

ため息をつくシカマルの頭を撫でるとシカマルにその手を振り払われる。

そのやり取りを、シカクはニヤニヤしながら見ていた。

「ふふつ、私これからキバと茶々丸達の散歩に行く約束してるから！じゃあねシカマル！！」

そう言うと、ミミはその場を素早く去って行った。

去り際に『今行くよマイブラザー！！』と、叫んでいたミミにシカマルはまたため息をつく。

「嵐のように突然来たと思ったら嵐のように去って行ったな…たくつ、相変わらずめんどくせー奴だな…」

（キバもシカマルも無事アカデミーを合格…けど、まだ本当の意味で合格したわけじゃないからね…）

茶々丸を優しく撫でながらミミは目を細めた。

「まあ、キバとシカマルなら大丈夫だろうけどね！さーて、キバと赤丸と散歩に行こうか、茶々丸！」

「ワンワン！！」

そう言ってミミは元気よく飛び出して行った…。

第1話「犬塚家のお姉ちゃん」(後書き)

はい!!第1話目からグダグダです!!

こんな感じの連載をしていくので、こんなんでも良かったらお付き合い合
いください!!

第2話「お姉ちゃんのチームメイト」

犬塚家

「キバ、今日は一緒に任務をするためのスリーマンセルの班決めらしいね」

母と姉が朝早くから任務に行っていて、家にいるのはミミとキバと愛犬を含めた忍犬達。
忍犬達と朝食をとりながら、ミミはキバにそう言う。

「そうだぜ！誰とチーム組むか楽しみだな！！」

「キバはこの人と組みたいとかあるの？」

「あゝ…基本誰でも良いけど、ナルトとだけは組みたくねえな」

「なんで？」

「アカデミー生の中で一番のドベだから。絶対足引っ張られる」

「ふーん…」

キバの答えに相槌をうちながら朝食を食べる。

「ミミ姉ちゃん、行って来まーす!！」

「行ってらっしゃい、気をつけてねー!」

朝食を食べ終わったキバは、ミミに見送られながら元気よく飛び出して行った。

「さて、家の掃除したらいつもの演習場に行くか」

そう囁くと、ミミは腕を捲り、家の掃除を開始した。

「!?!?!きたか!」

「おせーぞミミ!」

「!め〜ん!」

掃除を終え、演習場に行くと二人の男がミミに向かって手をふっている。

「あれ？ヤイバ先生は？」

「多分、またどっかで昼寝してると思う」

「先生が言ったことなの？！」

「いつものことだ、先に俺ら三人で演習するか」

「そうね…いくわよ！！シミズ！カノンも」

「「おう！」」

ミミの言葉を引き金に三人は戦いの体制に入る。

さて、今ミミと一緒に修行している二人の男…。

彼らはミミとスリーマンセルを組んでいるチームメイトだ。

水色の髪をした少年の名は水鳥シミズ、オレンジ色の髪をした少年の名は火塚カノンと言う。

どちらもミミが心から信頼できる人物だ。

修行も中盤にさしかかったその時…。

「すまねえなお前ら、寝坊した」

演習場に突然煙がまう。

煙の中から出てきたのは、深緑色の髪をした青年だ。

「「先生!!」「」

そう。この青年こそミニ達の担当上忍、劔ヤイバだ。

「もう！昼寝も良いけど修行しようって言ったのは先生の方なんだから！！時間守ってよー!!」

「悪かったって」

「まあ先生も来たことだし、修行再開しようぜ」

「よし、手加減せずかかってこい」

ヤイバがそう言うと、再び戦闘体制に入る。

彼らの実力はなかなかのものだが、その強さは今はまだ語らず、近々明かしていこうと思う…。

こうして彼らの修行は夕方まで続いた…。

（キバ、仲間ってとても大事だよ。誰と組んでもキバにとってかけがえのない仲間になるはずだよ…今の私達みたいに…）

第2話「お姉ちゃんのチームメイト」(後書き)

1話目よりもグダグダ!!

原作に入るまでは、こんな感じのオリジナルです。
なんとか頑張って書いていきます。

第3話「お姉ちゃんの同期生」

「おまえら、今日はガイさんとこの班と合同演習だ。俺は別のようがあるからおまえらだけで演習場に行ってくれ」

朝の8時。

担当上忍のヤイバがミミ達にそう告げると、すぐさま火影邸に向かった。

「あの暑苦しい奴の所に行くのかよ、ふざけんな死ね」

「シミズ…(汗)」

ブツブツ文句(というか毒舌)を言うシミズをカノンは冷や汗を流しながら見る。

「うーん、確かにガイ先生は暑苦しいけど、久しぶりにテンテン達に会えるから私は良いと思うよ。ここ最近、ガイさんの班とは任務とかですれ違いになったりしてなかなか会えなかったから」

そんな雑談をしながら三人は演習場へ向かった。

「はっはっはっ！！せーしゅんしてるかー！！！！！！」

三人が演習場に着いたその直後、目の前にガイが現れ親指をグツとたて、まっしろな歯をキラリと見せ、そう言い放つ。
いきなり現れたガイに三人は思わず一瞬固まった。

（あ、相変わらず濃い…（汗）

（良い人ではあるんだけど…（苦笑）

（まじうぜー…喋れなくしてやろうか）

ガイに対してそんなことを思いながら演習場の中心を見ると、ミミ達の同期生がすでに演習を行っていた。

「テンテン！！ネジとリーも！！久しぶり！！」

ミミが元気よく三人に向かって手を降る。

「きたか…」

「！！ミミ！！」

「シミズさんとカノンもお久しぶりです！！」

ネジ、テンテン、リーの三人はミミ達の姿を確認すると一旦演習を止め、自分達に近づく三人を暖かく出迎えた。

「ミミ、シミズ、カノン！ヤイバから話は聞いている。今日は我が教え子達と存分に演習に励んでくれ！！！」

「『はい！！！！』」

三人はネジ達と向かい合い、お辞儀をすると、すぐさま彼らから距離をとり、戦闘体制に入る。

ネジ達も同様に戦闘体制に入る。

テンテンがクナイを投げ、ミミもクナイを投げ、二つのクナイがぶつかり弾き飛ばされた瞬間、全員一斉に動きだした…。

「ハア…さすがテンテン。武器の扱いが上手。油断したら串刺しになっちゃつかも…」

「ミミこそ腕をあげたわね。また一層スピードが上がったわ」

ミミはテンテンから繰り出される数々の忍具をかわし、自慢のスピードでテンテンに攻撃を仕掛けるが、トンファーで受け止められる。

「くっ…！相変わらず良いスピードだなりー。これで重り付なんだよな…っ」

「カノンこそ、素晴らしい体術です！！君もまたたくさん努力して修行していることが拳から伝わってきます！！青春です！！」

カノンとリーは体術のぶつけ合い。

攻撃しては避けられ、攻撃しては受け止められることの繰り返し。どちらも良い勝負をしている。

「さすがは日向…と言ったところか。接近を許せば点結を突かれる…敵に回したくねえな」

「そのわりにはあまり焦っていないな。攻撃しようとしてもうまく距離をあけられる…」

ネジからなるべく距離をとり、遠距離で攻撃するシミス。

その攻撃を軽くかわし、接近戦に持ち込む機会を伺う。

それぞれの戦いは決着がつかぬまま夕方になった。

「ガイ班の皆、今日は演習に付き合ってくれてありがとう!」

演習を終え、泥だらけになった姿で綺麗に笑い、そう言うミミ。

「おう!みんな実に青春していた!ミミ、シミズ、カノン!またいつでも我が教え子達の相手になってくれ!」

ガイはいつものポーズをとり、そう言い放つ。

そんなガイの姿にミミ達は再び苦笑い(約一名は冷たい眼差しで)

「あつ、そう言えばもうすぐ中忍試験が始まるみたいね」

テンテンの言葉にミミ達はああ…と頷く。

「もうそんな時期か」

「確か今回は参加するんだよね?私達。もちろんテンテン達もだよ
ね?」

「ええ、そうよ」

(キバやシカマル達はまだルーキーだし、経験を積んでから参加するんだろっな…一緒に参加したかったなあ…)

ミミはこっそりため息をついた。

今年もルーキー達全員が中忍試験に参加することを知るのもう少し先の話である…。

おまけ

昼休憩時

ミミ「でさあ、愛しの弟が額宛を見せて満面の笑みを浮かべた時は凄かった！！天使！キバは私の天使だよ！！」

テンテン「また始まった…」

リー「ミミさんと手合わせしたりするのは好きなんですけど…」

ネジ「休憩に入る度に弟の話ばかりしてくるのは鬱陶しいな…」

カノン「俺とシミズはもう聞き慣れちゃったよ…」

シミズ「病気だな病気。ずっと病院で隔離されれば良いと思うぞ…」

ミミ以外「ハア……………」

終わり

第3話「お姉ちゃんの同期生」(後書き)

戦闘シーンを書くのは難しいですね(汗

てかオマケのお姉ちゃん暴走しすぎた感が否めません…。

もうちょっと落ち着かせた方が良かったかも知れませんが…。

次はシカマルと絡ませたいと思っています!!

第4話「お姉ちゃんとシカマル」

森の中

「キバ、チームメイトとは仲良くしてる？」

「おう！良いチームだと思うぜ！！な？赤丸！！」

「わん！」

キバが正式な下忍になり、同じ班の人達と任務を行い初めてから3日目になった。

キバのチームメイトは日向ヒナタと油女シノ。担当上忍は夕日 紅と言う女性の上忍らしい。

「しかし、キバのチームはなんか感知タイプの子ばっかだね。まさに探索のスペシャリストってところかな？」

「そうかもな」

ミミとキバは森の中を激しく散歩しながら喋る。

（確か卒業生の中から選ばれるルーキーは3チームまでだったよね…その内の1チームがキバ達の班だから…あと2チームはどこなんだろう…）

「飛ばすぜ赤丸ー！！」

「わんわんー！！」

スピードをあげたキバと赤丸に、ミミと茶々丸もスピードをあげる。

（シカマルのチームは確実に入ってるはず…となると、残りの1チームが気になるな…）

キバ達と散歩をしながらミミはそんなことを考えていた…。

「えーっと、今晚のメニューの材料は…」

キバ達と朝の散歩を終え、商店街で今日の晩御飯の材料を買いに来ていた。

その時、ミミの知っている匂いがした。

その匂いを辿っていくと…。

「…シカマル？やっぱりシカマルだ！！」

「あ？…ミミじゃねえか」

自分に近づいてきたミミに気づいたシカマルはふああっ…と欠伸をしながらミミを見る。

「こんな所で何してるの？」

「母ちゃんに頼まれて買い物。めんどくせーけど、ちゃんとやらねえと怖いからな、うちの母ちゃん…」

「ははは！そっか。そういえばさ！！シカマルは合格したの？アカデミーに送り返されてない？」

「ああ…一応合格した」

「だよなー！！シカマルなら合格すると思ってたんだー！！」

「ハア？なんでそう思ったんだよ？しかもそんな自信満々に…」

「あなたはめんどくさがったりしなけばできる男だから！！それに合格しなかったから困るし」

「なんでお前が困るんだよ」

「え？！それは…えっと…」

「?どうした?」

「なんでって…合同任務とかで一緒になれるかも知れないし…それに…その…」

だんだん言葉が小さくなるミミにシカマルは首を傾げる。

「…と、とにかく!!…!!…!!下忍になったからには少しはめんどくさがらず頑張りなよ!!」

「あ…はいはい…」

「はい、は一回!…」

「めんどくせーな…」

ミミは少し頬を赤らめながら、シカマルとそんなくだらないやり取りをしていた。

(うう／＼／＼普段は普通に抱きついたりしてゐるくせに…私のバカ…!…!)

ミミの心の中の葛藤を、シカマルは知る余地もない…。

第4話「お姉ちゃんとシカマル」（後書き）

スキンシップはするのに、言葉にするのは恥ずかしい変人なお姉ちゃん。

原作突入まで後少し…！

第5話「砂忍との出会い」

「もうすぐ中忍試験始まるね」

「去年は力をつけるために参加しなかったからな。頑張つて合格してやる!!」

「まったく、普段の任務の功績で中忍を決めれば良いもの…わざわざ試験で決めるなんてまじウゼエ…中忍試験考えた奴地獄に落ちれば良いのに…」

「……………(汗)」

シミズの毒舌を聞いて苦笑いしかできないミニとカノン。

「ま、まあそう言わずにがんばろうぜ!」

「そうそう……………!!」

「? どうしたミニ」

周りをキョロキョロと見回すミニに気づいたカノンが声をかける。

「…この里に違う里の人間がいるわ…」

「おそらく中忍試験を受けにきた忍だな」

鋭い嗅覚で察知したミミに対してシミズはそう答える。
その時、ミミの近くにいた茶々丸が走り出す。

「え？茶々丸?!」

「違う里の忍の所に向かってるなあれは…どうする?」

「もちろん追いかけるわ。それに、どんな奴らかちよっと気になるし」

「それもそうだな」

三人は走り出した茶々丸を追いかけることにした。

「茶々丸?」

茶々丸が止まったのを確認したミミ達は、ゆっくりと歩きだし、茶々丸が見ている方を見ると、六人の忍と子どもがいた。六人の内三人は同じ木の葉の額宛をつけており、残りの三人は違う里の額宛をつけていた。

「あの額宛って…」

「木の葉の同盟国、風の国の砂隠れの忍だな…」

ミミとシミズが小声で話していると、カノンが二人の肩をトントンと叩く。

「あそこにいる黒髪の奴…あいつ、今年のNo.1ルーキーのうちは一族の奴じゃねえか？」

その言葉に二人はカノンの指さした人物を見ると、背中の服にうちの模様が描かれている。

「確かに…間違いないな」

（へえ、最後の一班があのおうちは一族の忍が率いる班だったなんてね。これは手強い相手ね、キバ、シカマル…）

気配を消しながらそう話していると…

「クウン…」

「…?!…茶々丸…?」

茶々丸がミミの足元に怯えながらすりよってきた。

「…シミズ、カノン。茶々丸があのひょうたんを背負った忍に怯えているわ…あいつ…相当強いわよ…」

茶々丸の頭を優しく撫でながら二人にそう言う。

「だろうな…」

「！ おい、砂の奴らがこっちに来るぞ」

「挨拶くらいした方が良くないかな？」

「のんきだなミミ…」

「俺は構わないぞ。奴らの心をスタスタにするような挨拶を披露する気満々だからな…（ニヤリ）」

「頼むから問題だけは起こさないでくれ…相手が同盟国ならなおさら…」

そうこうしている間に砂の忍達は三人の姿をとらえた。

「あつ、気づかれた…えつと…こんにちわ？」

「（なんで疑問系なんだ…）お前ら中忍試験を受けに来たんたる？木の葉の里は良い所だからゆっくりしていつてくれ」

「……………」

スッ……………」

「が、我愛羅……」

我愛羅と呼ばれた瓢箪を背負った少年は三人には目もくれず、その場を去るうとする……。

ガッ

「こいつらがわざわざ挨拶してるのに、何も言わずに立ち去るとは……どういつ教育してんだよ」

(おいいいいい……！)

「……気安く触るな……殺すぞ……！！」

ゾクッ……

「……っ」

「(この殺気……ヤバい……！)俺のチームメイトが失礼なことをした……！！ほら、シミズ「気にくわなかったら殺気で脅して黙らせようとかバカなのか？なんでも自分の思い通りになるとでも？いっぺん病院に逝ってきたらどうだ？頭の方の」

「何やってんだシミズ……！！火に油注ぐどころか起爆札投げ込みやがった……！てか『いく』の漢字違うから……！！」

シミズの毒舌に我愛羅はしばし彼のことを睨み付ける。

我愛羅と一緒にいる二人は青ざめた顔で我愛羅を見る。

まさに一触即発の雰囲気になっていた……。

しかし…

「…ククク…おもしろい…お前…名は？」

我愛羅は殺気を出すのをやめた。

「俺の名前を聞く前にお前から名乗りやがれ狸野郎」

「…我愛羅…沙漠の我愛羅だ…」

「我愛羅…俺の名は水鳥シミズだ」

「水鳥シミズ…覚えておこう…ククク…うちはサスケに水鳥シミズ…中忍試験が楽しみだな…」

そう言うと我愛羅は三人を通り抜け、先に進む。

我愛羅と一緒にいた二人はしばらく呆然としていたが、我にかえると我愛羅を追いかけようとするが…

「ちよつと待って！！もし良ければ…あなた達の名前も聞かせてください…！…」

我愛羅の元へ行こうとしていた二人に、ミミは名前を尋ねる。二人はミミの言葉にキョトンとした顔つきになる。

「あ、ああ…私の名はテマリだ」

「俺はカンクロウ。まあよろしくじゃん…」

「私は犬塚ミミ！！よろしくねテマリさん、カンクウさん！！」

ミミは笑顔で答えた。

「はあ〜。シミズがあんなことするからどうなるかと思ったぜ……」

「中忍試験に行けばまた会えるんだよね！楽しみだなあ」

「厄介だな…さつき罵声を浴びせるだけじゃなくてそのまま潰しとけば良かったな…」

「んなことしたら同盟が破棄されちまうだろ！！」

「大丈夫だカノン。今のは冗談だ…半分な」

「残りの半分は本気かよ！！？」

「試験会場に行ったらキバの話をいっぱい話さなきゃ！」

「お前はそればっかりだな?!」

好きがってなことばかり言うミミとシミズにカノンは胃の辺りを押さえた。

こんな三人組が中忍試験でどう活躍するのか…それはまだ誰にも分からない…。

第5話「砂忍との出会い」（後書き）

砂忍と絡みましたね。

微妙に原作沿いですね。

そしてシミズの口の悪さが半端ない……！！！！

我愛羅にとんでもないことを言うシミズはなんて怖いもの知らず……。

次回はとうとう原作に突入！！

第6話「中忍試験開幕」

「お前ら、今年で初めての中忍試験だ。心の準備はできてるな？」

中忍試験当日。

ヤイバは今年初出場となる教え子三人に向かってそう言う。

「バツチリですよ先生!!」

「問題ない」

「むしろワクワクしてるくらいだぜ!!」

やる気は十分な三人に、ヤイバは頷く。

「とりあえず、試験会場に行く前に、俺からお前らに言うことはただ一つ……」

三人を見つめる目付きが真剣になる。

「後悔の残る戦いは絶対するな。勝っても負けても、自分が後悔するような戦いはするな…中忍試験…悔いが残らないよう頑張ってい……!!」

「「「はい!!」」」

ヤイバの言葉に三人は真剣な顔つきで返事をした。

中忍試験会場

ザワザワ…

「わぁー人多いね」

「なあ、カノン」

「? どうしたシミズ」

「このウザくて暑苦しい人ゴミ、クナイで刺しまくって良いか?」

「ダメに決まってるんだろ!!あと『人ゴミ』じゃなくて『人混み』

!!字が違う!!」

いつものシミズの毒舌にカノンがツッコミをいれる。
ミミはそんな二人のやりとりにクスクス笑う。
その時…

ガツンッ！

っと、誰かが殴られた音が聞こえる。

「何?!」

「おい、あれってリー達じゃないか？」

カノンが指をさした方を見ると、扉の前に知らない男達が立っていて、リーが頬をおさえていた。

「リーの奴、わざと殴られたな」

「ああ。リーのスピードなら普通に避けれるからな」

「……………」

相変わらず扉の前から退いてくれない男達に次はテンテンが説得しに行く。

「お願いですから…そこを通して下さい」

丁寧な口調で男達にお願いするが、一人の男がそんなテンテンを殴るつとする…が。

パシッ…

「女の子を殴ろうとするなんて最低ですよ」

男の拳をミミミが受け止めていた。

「ミミミ…」

「やっほー、テンテン」

「11のアマ…!!」

「茶々丸、女の子に手をあげる男なんて噛みついちゃえ!!」

「わんわん!!」 ガブッ!

「いてえ!!」

茶々丸がテンテンを殴ろうとした男の腕に噛みつく。

男が振り払う前に腕から離れ、嫌そうな顔つきをすると、ペッペッ…と唾を出す。

「あら、不味かったのね? 可哀想に…」

ミミミは茶々丸に口直しのビーフジャーキーを食べさせる。

そんな様子を見て男は怒りで顔を赤くする。

「おいミミミ。くだらねーことしてねえでさっさと三階にいって」

「おいおい、何のことだ? 三階はどこだぞ?」

「いや、その男の言うとおりだ…」

「!?!」

シミズの言葉に、後ろから同意する声が聞こえた。

後ろを振り向くと、そこにいたのは…うちはサスケだ…。

「サクラ、どうだ？お前なら気づいているはずだ…」

「え…?」

サスケがピンク色の髪をした少女、サクラにそう言う。

「お前の分析力と幻術のノウハウは…オレ達の班で一番伸びているからな」

「…もちろんとっくに気付いてるわよ。だってここは2階じゃない」

サクラがそう言うと、幻術が解けた…。

「ふうん…なかなかやるねえ。でも…見破っただけじゃあ…ズズツ、ねえっ!?!」

バツ!

扉を通せんぼしていた男が攻撃を仕掛けてくる…だが…。

ザツ

バシ、バシ!

「!?!」

その攻撃はリーによって止められた。

「ナイス、リー!?!」

「けどあいつ、さっきまで何もしなかったよな?どうして急に…」

リーの行動に疑問をもつカノン。

「フー」

「おい、お前約束が違うじゃないか。下手に注目されて警戒されたくないと言ったのはお前だぞ」

「だって…」

リーはそう言うところある人物に目を向ける。
その人物とは…

サクラだ。

「…リー、あのサクラって子見てるね」

「しかもなんか頬少し赤いな…」

「あの一」

「！」

ミミ達がそう話している間にも、リーはサクラに近づく。

「僕の名前はロック・リー。サクラさんというんですね…ボクとお付き合いしましょう！！死ぬまでアナタを守りますから！！」

そんなことを言い出したリーに、ネジ、テンテン、シミズは呆れた様子で。ミミとカノンは呆然とした様子でリーを見た。

「ぜつたい…イヤ…あんた濃ゆい…」

即効でフラれた。

(うわぁ…)

(まあ、当然の結果か…)

(頑張れ、リー…)

ミミ達は哀れみのこもった目でリーを見た。

「おい、お前…」

ネジがサスケに向かって言う。

「名乗れ」

「人に名を聞く時は、自分から名乗るもんだぜ…」

そんな二人のやりとりに気づいたシミミが『あらら…』と思わず声を
もらす。

「ネジの奴、早速うちはサスケに目をつけたな」

シミミも二人のやりとりを見てそう答える。

「うちは一族は木の葉の優秀な戦闘部族だからな…」

その時…。

「目つきの悪い君。ちょっと待ってくれ！」

「！」

「げっ!!」

「何だ？」

リーはサスケを見て口を開く。

「今ここで、僕と勝負しませんか」

リーの目は本気だった…。

中忍試験…いきなり嵐の予感だ…。

第6話「中忍試験開幕」(後書き)

原作に突入しました！

ヤイバ先生の台詞が少しありがちかも知れませんが…。

次回、サスケとリーが対決！！

そしてミミ達がそれを傍観します。

第7話「サスケVSリー」

「あいつ…今ここで勝負する気かよ…」

まだ中忍試験は始まっていないのに、サスケに勝負を挑むリーにため息をつくシミズ。

「ボクの名前はロック・リー。人に名をたずねる時は自分から名乗るもんでしたよね、うちはサスケ君…」

「フン……知ってたのか」

ザッ

「君と闘いたい！」

サスケをまつすぐに見てそう言う。

「あれ？そう言えばネジとテンテンは？」

「先に行ったぞ」

「ええ！一緒に行こうと思ったのに」

「気づかないお前が悪い…さて…うちはサスケ…お前の実力、しっかり見せてもらおうぞ…」

ミミとカノンは会話を終えると、サスケとリーを見た。

「あの天才忍者とつたわれた一族の末裔に…ボクの技がどこまで通用するのか試したい…それに…」

リーはサクラをじ…と見る。

(かなり本気ね…)

リーはサクラをじ…と見たあと、パチッとウィンクをする。

「イヤー!!あの下まつ毛がイヤー!!!」

(スゲエ拒否反応だな(汗)いい奴なんだけどなあ、リーは…)

「確かにあのなりでウィンクはキモいな。軽く殺意わいたぞ」

「そこまで!?!」

目を細めて言うシミズの毒舌にカノンは苦笑いするしかなかった。

「髪型もイヤ…眉毛もゲジゲジ…」

「すごい言われようね…なんかリーが可哀想に思えてきた…」

「オレもだ…」

「いや、まったく感じない。むしろあの罵倒はまだまだ軽いと思っ
がな……」

と、その時……

「フツ、天使だ君は……!」

チュ……とサクラに投げキッスをするリィ。

「……!!キヤー……!!」

ザッ……!!……ゴン!

リィが飛ばした投げキッスを必死で避け、タンコブができるほど強
く頭を打った。

「……あれは流石にキツイ……」

リィの投げキッスを見たミミとカノンは声を揃えてそう言った。

「気持ち悪いもの見せやがって……あいつ後からフルボッコにしてか
ら土下座させてやる……ついでにあのピンク髪の女にも文句言っ
てやる」

「そこまでしなくても良いだろ(汗)」

「しかもあの女の子とばっちり受けてるし……」

(またまたサスケじゃん!!……くっそー!!……くっそー!!……)

サスケにばかり目をつけられる事にかなり不満を持つ金髪の少年は心の中で文句を言う。

「アンタ変なモン投げんじやないわよ！なんか命がけでよけちゃったじゃない！！」

「そんなにイヤがらなくても……」

「“うち”の名を知ってて挑んでくるなんてな。はっきり言ってる無知な輩だな……お前。この名がどんなもんか……思い知るかゲジマユ」

「是非！」

「待て」

そこで待ったをかけたのは一人蚊帳の外だった金髪の少年だ。

「どうしたんだナルト？」

（ナルト……？）

聞き覚えのある名前にミミは少し考え込む。

そして、思い出したらしく、ポンッと手のひらを叩く

（ああ……確かキバが言ってた……）

「ゲジマユはオレがやるってばよ！5分もあれば片づく！」

イラついたようにそう言うナルト。

「ふざけてんのかてめーら」

突然、どす黒い感じの声が聞こえる。ナルト達はその声に一瞬ビクリと体を動かす。

その声を発したのはシミズだった。

「な、なんなんだってばよ!！」

「誰?あの人…」

(こいつ…できる…!!)

三人は一斉にシミズを見る。

突然イラついた声を出したシミズにミミとカノン、リーはかなりビツクリしている。

「オレはあのゲジマユの同期生だ…うちはサスケ…お前はさっきリに対して『無知な輩』と言ったな」

「……それがどうした」

「本当に無知な輩なのはお前のほうだ。そのアホ面の金髪はもちろん、うちはサスケ…お前でもリーは倒せない…」

シミズはナルトとサスケを睨み付けながら言う。

「なんだと——!——!」

「ナルトはともかく、サスケ君があんな人に負けるわけないじゃない!!」

「女は黙つとけ。ただでさえブスなのに余計醜い顔になるぞ」

「なんですつてー!!?!? (顔はカッコいいのに性格が最悪だわ!!)」

(シミズ言いすぎ…サクラちゃんだっけ?普通に可愛いと思うけどなあ…)

「てんめ〜!!サクラちゃんになんてこと言うんだってよ!!」

「シミズ君!!サクラさんに失礼ですよ!!」

「話が續かねえから黙ってる…!!」

シミズはナルトとリーをギロリと睨んだ。

「…ナルトならまだしも、オレがこのゲジマユに負けるだど…」

(あのナルトって奴、扱いが酷いな…)

どことなくナルトの扱いの悪さに同情するカノンがいた。

「たとえ才能に恵まれていても、所詮はアカデミーを卒業したばかりのルーキー…リーはこんなナリだが、実力は本物だ。この闘いでお前はまだまだ井の中の蛙だと言つこと思い知る…」

シミズはそう言いきると、『話は終わったからさっさとやれ』と

目で訴えた。

「くそー！！バカにしゃがって！！とにかく、こいつはオレが倒す
！！」

ダッ！

ナルトはまっすぐリーに向かっていく。

「はあ…真正面からくるなんて…そんなんじゃリーには絶対勝てないよ…」

「リー…お前の実力、ルーキー達に見せつけてやれ…！！」

スッ…バシ！

「！！ぐっ」

ダッ、ザッ！

「木ノ葉 烈風！！！！」

ドガ！

「うわア…！！」

リーの攻撃が当たり、ナルトはゴロゴロ転がる。

「宣言します。君達はボクに絶対敵いません」

「自分の実力に自惚れてる新人どもには負けねえよ、リーは…」

「随分とリーの肩を持つねシミズ」

「別に…ああ言う視野の狭い奴らを見ると腹がたつだけだ…それに、あいつが強いのは本当だからな…」

「フフ…」

シミズの答えに、ミミは穏やかに笑った。

「なぜなら、今ボクは木の葉の下忍で一番強いですからね」

「…あの野郎…フルボッコと土下座の他に木に吊るすのも付け加えてやる…」

((目が本気だ…!!))

シミズのそんな計画に気づくことなく、リーはサスケを挑発する。

(こいつオレの蹴りを腕で止めやがった…あれは人間技じゃない。どんな忍術を使ったか知らねーが…)

「サスケ君？」

「面白い。やってやる」

「あ！やめてサスケ君！受付の4時までにあと30分もないのよ…」

「5分で終わる…」

「サスケ君!!」

(無理だな…)

サスケはサクラの制止を無視して、リーに向かっていく。

(来た!!…:…ごめんなさいガイ先生…禁を破ることになるかもし
れません。あの技を使うことになるかも…!)

フッ…

「!!!!」

「木ノ葉旋風!!」

リーはサスケに攻撃を仕掛ける。

ザッ

サスケはリーの攻撃をガードするが、リーの攻撃がガードをすり抜け見事に命中する。

(多分あいつはリーの技が高速の体術と気づいてないな…)

「サスケ君!!!!」

(ど…どういふことだ…?)

(今…確かにガードしたはずなのに…)

(ガードをすり抜けやがった…！何だ…忍術か…それとも幻術…！？)

「まだ体術って気づいてないんだよね？サスケ達」

「ああ…」

ボソリと小さな声で話すミミとカノン。

その時、サスケの様子に変化が起こった。

「！ あれは…うちは一族の血継限界…写輪眼…！」

(アレが写輪眼ですか…)

(アハ…やっぱり凄いサスケ君って！これがカカシ先生と同じ血継限界なら…これでゲジマユの術を見抜ける…！)

「甘いな…」

「リーのは、幻術でも忍術でもないからね…」

リーは体制を低くすると、サスケを思いきり蹴りあげた。

(写輪眼で見切れねーなんて…まさか…こいつの技は…！)

「そう…ボクの技は忍術でも幻術でもない」

「ん…？」

リーの技をくらい、気絶していたナルトが目を覚ました。

「！サ、サスケエー！！」

「！！くっ、影舞葉…！！」

「そう！ボクの技は単なる体術ですよ……サスケ君。にわかには信じられないかもしれませんが…」

「うわぁ…凄い闘いだなぁ…」

「てかオレらはさっさと受付に行かなくて良いのか？」

「写輪眼には幻・体・忍術の全てを見通す能力があるといわれています。確かに、印を結びチャクラを練るという法則性が必要な忍術や幻術は見破って確実に対処できるでしょう。しかし体術だけはちよつと違うんですよ…」

「ど…どういうことだ！？」

「分からないのか？」

そこに口をはさんできたのはシミズだ。

「写輪眼で動きを見切っても、体術はお前自身が反応できる範囲のものでなければ体が動かないんだ…リーのスピードは、今のお前の身体能力じゃついていけないんだよ…」

シミズの説明が終わったのと同時に、リーは自分の腕に巻いてある包帯を少し外す。

「知っていますか？強い奴には天才型と努力型がいます。君の写輪眼がうちの血を引く天才型なら…ボクはただひたすらに体術だけを極めた努力型です」

「リー…」

リーの凄まじい努力を今いるメンバーの中で一番知っているカノンはリーの言葉を真剣に聞いていた。

「言ってみれば君の写輪眼とボクの究極の体術は最悪の相性…そしてこの技で証明しましょう」

(…あいつが今からする技…あまり良い予感がしないな…)

(リーの奴…なんか無茶なことしようとしてるんじゃないだろうな…)

リーの言い方に違和感を感じるシミズとカノンをよそに、リーはサスケに技を繰り出そうとする。

「努力が天才を上回ることを」

(何をやる気だ…!?)

「ついに決着が…!?!」

「そこまでだリー」

すると、リーの動きがいきなり止まった…いや、止められた。

(……サスケがやられた!? オレが気絶してる間に何があったんだってばよ……)

「大丈夫!? サスケ君!!」

「おい…あの亀って…」

「うん、間違いない。ガイ先生の口寄せ獣だ!!」

「……………」(嫌そうな顔)

「み…見てらしたんですか…」

「リー!今の技は禁じ手であろうが!」

「す…すみません。つい…」

リーは鬨いを止めた亀に怒っていた。

「し…しかし、もちろんボクは“裏”の技の方を使う気はこれっぽちも…」

(裏の技だと…?)

シミズはリー達の会話を聞いて眉をしかめた。

(内容を聞いてる限りじゃ、相当ヤバい技みたいだな…下手すれば命に関わる…とか、そんな類いか?)

「覚悟ができたであろうな?」

「オ…オッス…ではガイ先生お願いします!」

「来るぞ…」

「初めて会う彼らの驚く反応が目に見えかぶよ…」

ボン…!

「まったく!青春してるなー!お前らーっ…!」

キラーン!

「!」

「!」

「うっ…うっげええええーっ…!…!もっと濃ゆいのが出て来たってばよー…!」

「ぷっ…アハハ…!三人とも良い反応…!特にナルト…!」

「相変わらず濃ゆい…」

「…んげっ…」

三人は激濃ゆだの、激おかつぱだの、激眉だの好きがってなことを言っていた。

その後、ガイはりーを殴り、涙を流した後、ガシッと抱き合った。端から見れば非常に暑苦しい光景だった…。

「いいんだ、りー！若さには間違いつてのはつきものなんだ……」

「優しすぎます…先生っ！！」

「だがケンカをしたあげく禁を破ろうとした罰はーたてまえ上、中忍試験後にも受けてもらうぞ」

「ハイッ！！」

「演習場の周り500周だ！！」

「押忍！！」

もう勝手にやっつけ…という雰囲気だ。その時、ガイがこちらを見てきた。

「それよりカカシ先生は元気かい？君達！」

「カカシを知ってるのか……？」

「知ってるも何も……クク……」

「？」

少し笑うと、ガイは一瞬で視界から姿を消した。

「人は僕らのことを『永遠のライバル』と呼ぶよ……」

「「「!!!」」」

視界から消えたガイは、ナルト達の背後に回り込んでいた。

「50勝49敗」

「いつの間に……!!」

「カカシより強いよ、オレは……」

(そ…そんな…速い!!スピードならカカシ以上だ!!……人間か…!?)

「どうです!!ガイ先生はスゴイでしょう!!」

(確かにスゴイよね、ガイ先生って)

(あの見た目だな……)

(早くどっか行ってくれねえかな……)

「今回はリーが迷惑をかけたが、オレの顔に免じて許してくれ。このさわやか顔に免じて……」

(…すいません、どの辺りが……?)

「あんたのどの辺がさわやかなんだよ。冗談はあんたの存在だけにしてくれ。てか暑苦しいからさっさと帰れや」

((シミズー!!!))

(先生に向かってあの容赦ない毒舌…)

(あいつ…やはりできるやつだ…)

(なんだってばよあいつ…サスケよりもムカつくってばよ…)

シミズの容赦ない毒舌にミミとカノンは心の中で叫び、ナルト達はナルト達で、そんなシミズをそれぞれの思いで見っていた。

「サスケ君…最後に一言言っておきます。実のところボクは自分の能力を確かめるためにここへ出てきました」

ギユ

「さっきボクはウソを言いました。おそらく木の葉の下忍で最も強い男はボクのチームにいる。そいつを倒すために出場するんです…そして君も…ターゲットの一人」

ザッ

「試験！覚悟して下さい!!」

リーはその場から去った後、サスケは拳を強く握った。

「サスケ君…」

「けっ…なんだ！うちは一族もたいしたことねーんじゃないの？」

「ナルト！…！」

「くっ…うるせー…次はあいつをのしてやる…」

「フン、ボロ負けしたくせによ」

「ちょ…何よ！ナルトアンタ…！」

「お前も見ただろ。あいつの手………」

「「「！」「」」

「あのゲジマユはすっげー特訓したんだろ。毎日毎日…お前よりもな…そんなだけのことだってばよ」

ナルトの意外な言葉に、ミミ達は驚いた顔をする。

(こいつ…)

(ただ猿みたいに騒いで悔しがるだけかと思っただが…)

(へえ、良いこと言うね…これは少し期待しても良いかも知れないね…ナルトか…)

三人の中のナルトの印象が変わった瞬間だった…。

この先の中忍試験…どんな忍達と出会うのか…中忍試験開始まであと少し…。

第7話「サスケVシリーズ」（後書き）

なんだかシミズがでしゃばりすぎた気がします…。

意外と書きやすいんですよ、シミズって！

次回、ルーキー達全員集合！！

いろんなキャラと絡ませていきたいです！！

第8話「ルーキー9」

リーとの戦闘を終え、試験会場の教室へ向かおうとするナルト達を
ミミは呼び止める。

「君達！さっきは同期のリーが迷惑かけたね」

「あ？誰だつてばアンタ…？」

「おおかたそいつ（シミズ）のチームメイトか」

（あれ？あの頬のペイント…どっかで…）

「ごめんごめん、紹介がまだだったね。さっき毒舌をはいていたのが
水鳥シミズで、隣にるのが火塚カノン。そして私は犬塚ミミで、
この子は忍犬の茶々丸。君達の先輩忍者だから、これからよろしく
ね！！」

「…犬塚…!?」「」

ミミの名字を聞いた三人は驚く。
そんな三人にミミは首を傾げる。

「もしかして…キバの姉ちゃんかアンタ?!」

「思い出したわ!そのフェイスペイント…キバにもついてたわ!」

『キバ』という言葉を聞くやいなや、ミミは目を輝かせる。

「そう!私はキバの姉だよ!!まあ時間もないし、キバの話は後から聞いてもらうことにして…一緒に試験会場に行きましょう」

そうしてミミ達は試験会場の教室へと向かった…。

その後、教室の前にいたカカシとナルト達が話をする。

なんでも、サクラに自分の意志で試験を受けさせようとウソをついていたらしく、ナルトとサスケだけがここに来れば、受験を中止にするつもりだったらしい。

「さすが、ヤイバ先生の先輩だね!」

ナルト達と話を終えたカカシがこちらにやってくる。

「君達は確か、ヤイバの部下だったよね?」

「はい。カカシ先生の話は、ヤイバ先生やガイ先生から聞いています…良いチームですね、貴方のところのチームは…」

カノンが礼儀正しく言う。

「あいつらは個性的だが、オレの自慢のチームだ…君達は先輩忍者として、あいつらと仲良くしてくれると助かるな」

「…気分次第ですね…」

シミズは素っ気なくそう答える。

ミミとカノンはシミズの素っ気ない態度に苦笑いした…。

「まっ、頑張ってきなさい」

そう言うとカカシはその場から姿を消した。

そしてとうとう彼らは試験会場へと足を踏み入れる。

ギィ…

「す…すげー」

「……………」

「な…何よ…これ…」

扉を開けると、たくさん忍達がいた。

かなりの数の鋭い視線がナルト達に向けられた。
と、その時…。

ガバツ

「サスケ君おつそーい」

「……」

「私っいたら久々にサスケ君に逢えるとおもってえ〜ワクワクして待
ってたんだからー」

突然サスケに飛び付いてきたポニーテールの少女。
どうやらナルト達の同期の忍らしい。

「サスケ君から離れーっ！！いのぶた！！」

「あーらサクラじゃない。相変わらずのデコリ具合ね、ブサイク

ー」

「なんですってー！！」

「べ〜」

見たところこの二人は恋のライバルのようだ。

「またうるさそうな女が…どこかぶりっ子してるところが腹立つな」

「そう言わないの。あれは少しでも好きな人に可愛く見られたいって言うアピールなんだから…」

ミミとシミズがそんな会話をしていると…。

「なんだよ、こんなめんどくせー試験お前らも受けんのかよ！」

『めんどくせー』と言う言葉にミミはまさかと思い、その人物に目を向ける。

「なんだあオバカト」「シカマル！！」「ちよっ…！！」

ナルトの言葉を渡り、シカマルの登場に心底嬉しそうな表情をして声をあげるミミ。

「やっぱお前も参加してたか、ミミ…」

「シカマル、知り合い？」

シカマルの隣にいたポテチを食べている少年が問う。

「ああ…こいつは犬塚ミミ。一期上の先輩でキバの姉だ…」

「「キバの姉?!」」

少年はもちろん、サクラとサスケを取り合っていた少女も驚いた声をあげた。

「そうだよ。それから…後ろの二人にはシカマルもまだ会ってなかったよね」

「ああ、そうだな。ミミのチームメイトとは今日初めて会った」

「自己紹介しなきゃいけないな…オレは火塚カノンだ」

「…水鳥シミズ」

「まさかキバのお姉さんがいたなんて…ボクは秋道チヨウジ。よろしくね」

「私は山中いの。よろしくお願ひします（ヤダ、水色の髪の彼、カツコいいじゃない…!）」

シカマルとの再会に笑顔になるミミ。

「へえ〜あいつがシカマルね…あーいうタイプが好きだったんだな
ミミは…」

「！！ちよっ…シミズ！！／／聞こえたらどうしてくれるのよ！
！／／／」

幸い、シミズの言葉はシカマル達には聞こえていなかった…。

（へえ〜ミミさんって、シカマルのことが好きだったんだ〜）

…山中いのを除いては…。

「ひゃっほ〜みーっけ！」

「「…」」

「「…こんにちは…」」

「これはこれは皆さんおそろいでエー！」

いきなり別の場所から声がかかってくる。

（…！この声…間違いない！）

「何だとお前らもかよ！…ったく」

「く〜なるほどねー。今年の新人下忍9名、全員受験ってわけか！
さて、どこまでいけますかねエオレ達。ねエサスケ君」

(やっぱり……！……！)

「フン…オレ達は相当修行したからな…お前らにゃ負けん」キバー
「……！！！！」「うわぁ！？」

キバが台詞を言い終わる前に、ミミがいきおい良くキバに抱きつく。
まさか弟の班も受験してるとは思ってもいなかったなので、ミミにと
って嬉しいほかなかった。

「ちよっ…ミミ姉ちゃん！！いきなり抱きつくなよ、ビックリした
じゃねーか」

「ごめんね！でもキバの班も受験するとは思わなかったから…嬉し
くて嬉しくて！！」

そう言っつて抱きつく力を少し強め、頬づりまでするミミ。

「あ…あのさ、嬉しいのは分かったんだけど…みんなこっち見てる
から…そろそろ離れてほしいんだけど…／＼／」

ミミの行動にルーキー達は呆気にとられ、シミズとカノン、シカマ
ルには呆れられる。

(あのキバがおとなしくなってる…！！)

キバと同期のメンバーは、そう思っていた。

充分にキバを抱きしめたミミは、キバの後ろにいるキバのチームメ
イトに近づく。

「君達がキバのチームメイトだね。キバから話は聞いているよ。」

私は犬塚ミミでこっちが茶々丸、見ての通りキバの姉だよ。よろしくね」

「あ、はい…私は…日向ヒナタです…よろしくお願いします…」

「油女シノだ…よろしく…」

「よろしくね!で、こっちが私のチームメイトの…」

「水鳥シミズだ」

「……………」

「?カノン?」

「!…悪い…オレは火塚カノン。よろしくな」

ミミ達はこれでルーキーとは全員と対面した。

「……………」

カノンは先程からある人物に目を向けていた。

(ヒナタ…)

その人物とは…ヒナタだ。

ヒナタを見つめるカノンに気づいたのはシミズただ一人…。

「いやあさっきはびっくりしたね」

ミミはシミズとカノンに言う。

実は先程、眼鏡をかけた青年、薬師カブトという男が、音符のマークがついた忍の攻撃をくらった。

その忍達は、最近できた音隠れの里からきたらしい。

「しかし、どうも腑に落ちないな…」

「何が？音の忍の攻撃方法か？」

「いや…まあ、お前らが気にすることねーよ」

「そうか…」

(音の攻撃方法はなんとなく予想はついたが…あの薬師カブト…どもも胡散臭いな…)

シミズが一人、考えていると…。

「静かにしやがれどぐされヤローどもが!」

ボン!

「な…なんだ？」

男の怒声が聞こえたと思ったら、突然煙がたち、かなりの数の忍が

現れた。

「待たせたな…『中忍選抜第一の試験』試験官の森乃イビキだ…」

「わあ…いかつい顔…」

ミミは思わずボソリと囁いた。

「試験官の許可なく対戦や争いはありえない。また、許可が出たとしても相手を死に至らしめるような行為は許されん。オレ様に逆らうようなブタ共は即失格だ。分かったな」

「ククク…オレ様主義ってやつか？嫌いじゃねえぜ？オレがやる立場ならな…」

「……………」

なんとなく身の危険を感じるミミとカノン。

「ではこれから中忍選抜第一の試験を始める…志願書を順に提出して代わりにこの…座席番号の札を受け取り、その指定通りの席に着け！その後、筆記試験の用紙を配る…」

筆記試験と聞いた途端、シミズはミミとカノンをジト目で見る。

「心配しないで！もしもの時の秘策もあるから！…」

「オレはシミズみたいに頭は良いわけじゃないが、悪いわけでもない…なんとか解いてみせるさ」

「そうか…」

ミミ達の後ろで叫んでいる人物がいるが、完全無視だ。
中忍選抜第一の試験が始まるうとしていた…。

第8話「ルーキー9」（後書き）

ルーキー全員集合！！

なるべくシカマルと絡ませたいですね…。

次回、第一の試験！！

第9話「第一の試験開始」

「試験用紙はまだ裏のままだ。そして、俺の言うことをよく聞くだ」

中忍試験官、森乃イビキはそう言って、チョークを手にする。これから中忍選抜の第一試験が始まるのだ。

「この第一の試験には、大切なルールつてもんがいくつもある。黒板に書いて説明してやるが、質問は一切受け付けんからそのつもりでよく聞いとけ」

多少意味深な言葉を言うイビキにミミ達は首をかしげる。

「第一のルールだ！まず、最初にお前らには最初から各自10点ずつ持ち点が与えられている。筆記試験問題は全部で10問、各1点。そして…この試験は減点式になっている」

(なんでわざわざ減点式なんだ…)

シミズは眉をひそめてそう思う。

「つまり、問題を10問正解すれば持ち点は10のまま。しかし、

問題で3問間違えれば、3点引かれ、7点になるわけだ」

「第二のルール…この試験はチーム戦。つまりは受験申し込みを受けたチームの合計点数で合否を判断する…つまり、持ち点の合計点をどれだけ減らさずに、試験をおわれるをチーム単位で競ってもらおう」

途端、ミミとカノンの背中がゾクリとした。

シミズの鋭い視線が、二人を交互に見ていた。

ちなみに、ミミ達がどこに座っているのかと言うと、ミミはシカマルの隣、シミズはミミと少し離れた所、カノンはシミズの隣だ。

「ちょ、ちょっと待って！持ち点減点式の意味が分かんないけど、チームの合計点ってどういうこと!？」

サクラがイビキに疑問を投げ掛ける。

「うるせえ！お前らに質問する権利はないんだよ！これにはちゃんと理由がある。黙って聞いてる！分かったら肝心のルールだ」

(理由…ってなんだ?)

「第三に、試験途中の妙な行為…つまり、“カンニング及びそれに準ずる行為を行った”とここにいる監視員達に見なされた者はその行為1回につき持ち点から2点ずつ減点させてもらう。

試験途中に退場してもらおう者も現れるだろう」

(…まるでカンニングがあると確信してるような口ぶりだな…)

(大丈夫かな私…)

「不様なカンニングなど行った者は、自滅していくと心得てもらおう。仮にも中忍を目指す者。」

忍なら立派な忍らしくすることだ」

(…なるほどな…)

イビキの言葉にシミズはこの試験の本当の意味を理解した。

「そして、最後のルールだ。この試験終了時までには持ち点を全て失った者：および正解数0だった者の所属する班は…班員全員を不合格とする…!」

この言葉に会場の下忍全員に緊張がはしる。

「試験は一時間だ。よし…始める!」

イビキの合図に、筆記試験がスタートした。

(……………なんだよこれ…下忍の俺らが分かるような問題じゃない…)

カノンは自分の答案用紙に書かれている暗号文などを見て、ため息

をつく。

(忍なら立派な忍らしくすること…この試験の系はなんとなく分かったが…情報収集系の忍術が使えないからやりようがないな…どうしよう…シミズに殺される…)

自分の無残な状況を思わず想像してしまい、カノンは額を押さえる。

…コロッ…

(?!?...これは...)

カノンの答案用紙に転がって来たのは、シミズの右耳につけている黒のピアス。

(シミズ...)

カノンは目だけをシミズに向ける。
当の本人は黙々と答案用紙に答えを書いている。

(そうか…このピアスがあれば…)

カノンはピアスを利き手じゃない方で握る。

『…カノン、聞こえるか?』

ピアスを握った途端、頭の中でシミズの声が聞こえる。

…実は、シミズのつけているピアスは頭の中で交信ができる電波を放っている。

二つのピアスの内の一つを相手が所持することでテレパシーが可能になる便利なものだ。

『ああ、声が少し小さく聞こえるが問題はない』

ただし、元々耳につける物なので、ピアス穴を開けていない者には、少し聞き取りにくくなることと、1日4時間までしか使えないことが難点だ。

『今から問題の答えを言うからしっかりと書けよ』

『もちろんだ』

カノンは鉛筆を持ち、シミズが言う答えを書いていった。

その頃、ミミの方は…。

「…ワン、ワン」

「なるほど…」

ミミは茶々丸の小さな鳴き声を聞き、答案用紙に答えを書いていく。ちらり…と目だけを隣のシカマルの方へ向ける。

(隣がシカマルで助かった)。茶々丸に答えを見てもらいやすいし、シカマルの頭の良さならこの難しい問題を解けること間違いないだから安心だわ)

視線を答案用紙に再び戻すと答えを書く。

茶々丸やミミの視線に気づいていたシカマルは、ハア…とため息を

つく。

(ミミの奴…完全に俺の答えをカンニングしてやがる…たくっ、筆記試験なんてめんどくせー…)

心の中でそう言いながらも、答案用紙に答えを書く手を止めなかった…。

「よし！これから第10問目を出題する…とその前に一つ、最終問題についてのちょっとしたルールの追加をさせてもらおう」

(ルールの追加!?)

「では、説明しよう。これは絶望的なルールだ。

まず、お前らにはこの第10問目の試験を…“受けるか”“受けない”かのどちらかを選んでもらう！」

「え…選ぶって！もし10問目の問題を受けなかったらどうなるの!?!」

「“受けない”を選べば、その時点でその者の持ち点は0になる…つまり、失格！もちろん、同じ班の者もだ」

「そんなの“受ける”を選ぶに決まってるじゃない！」

今の内容を聞いた限りでは確かにそうだ。
だが、次のイビキの言葉に絶句することになる…。

「そして、もう1つのルール。

“受ける”を選び正解できなかった場合、その者については今後永久に中忍試験の受験資格を剥奪する！」

「……………!?」「……………」

「そ…そんなバカな理由があるか！現にここには、中忍試験を何度か受験している奴だっているはずだ！」

弟、キバの言葉にうんうんと頷くミミ。

「クク、クククク…運が悪いんだよ。今年はこの俺がルールだ。その代わり、引き返す道も与えてるじゃねーか。自信のない奴は大人しく“受けない”を選んで…来年も再来年も受験したらいい」

「…ねえ、シカマル。シカマルはどうするの？」

ミミはボソボソと小さな声でシカマルに問う。

「…ぶつちやけめんどくせーから帰れるなら帰りてーけど…それじゃあ試験官の思う壺だ…まあ、一応受けるつもりだ…（この試験の裏に気づいちまったしな…）」

「そっか…じゃあ、シカマルが受けるって言ってるし、私も受けよ

「と」

「…俺が受けなくても受けてたくせによく言っぜ…」

「あ、バレた？（半分本気だったけどね…）」

ミミがシカマルとこんな会話をしている頃、シミズとカノンも頭の中で会話をしていた。

『…ただの試験官が受験資格を永久剥奪なんてできるはずがない…
奴は俺たちを試している…』

『じゃあ、手を挙げないのが得策か…』

「では、始めよう。この第10問目…“受けない”者は手を挙げる。
番号確認後、ここから出てもらう」

このことに怖じ気づいた者達が手を挙げ、1チーム、また1チーム
と、受ける者が少なくなっていく。

（腰抜けどもめ…）

シミズが出ていく忍達に悪態をはいていると…。

バアン！！

ナルトが机を思いきり叩いた。

「なめんじゃねー！！オレは逃げねーぞ…！！受けてやる！もし、
一生下忍になったって…意地でも火影になってやるから別にいいっ

てばよ！怖くねーぞー！！」

「…もう一度訊く…人生を賭けた選択だ。やめるなら今だぞ」

「まっすぐ自分の言葉は曲げねえ…オレの忍道だ！！」

ナルトは迷いのないまっすぐな目をして言い放つ。

(ナルト…)

(…今の言葉で、他の奴らも受ける気になっている…)

(凄いな、あいつ…)

「いい決意だ。では、ここに残った全員に…」

“第一の試験”合格を言い渡す！！」

ヤイバ班、第一の試験…クリア…。

第9話「第二の試験開始」(後書き)

ヤイバ班で、シミズがダントツに頭良い設定です。
さすがにシカマルには敵わないけれど…。

次回、第二の試験!!

第10話「第二の試験開始」

…森乃イビキは確かに、残った者全員に『合格』を言った。
その言葉に周りがざわついた。

「ちょ…ちょっとどういうことですか！？いきなり合格なんて！10問目の問題は！？」

「そんなものは初めから無いよ…言ってみればさっきの2択が10問目だな」

「え！！？」

「ちょっと…！じゃあ今までの前9問は何だったんだ…！？まるで無駄じゃない！」

「あ！テマリさんだ！！！」

「なんだミニミ。あの砂忍の女と知り合いか？」

「うん！！もう友達だよ！！！」

お〜いっと、テマリに手を振るミミ。

テマリは一瞬、ミミと目が合うが、すぐにそらされてしまった。

「……………あれ……………?」

(無視されてんじゃないか…)

シカマルは多少哀れみのこもった目でミミを見た。

「……………無駄じゃないぞ。9問目までの問題はもうすでにその目的を遂げていたんだからな…君達個人個人の情報収集能力を試すという目的をな!」

「?……………情報収集能力?」

この後、イビキからこの試験の意味というものを聞かされる。
イビキの額に刻まれた痛々しい傷痕も見た…。

(酷い…)

(これが忍の世界…か…)

「“受ける”を選んだ君達は一難解な“第10問”の正解者だと言つていい!これから出会うであろう困難にも立ち向かっていけるだろう…入口は突破した…『中忍選抜第一の試験』は終了だ。君達の健闘を祈る!」

第一の試験を無事に突破し、ミミとカノンはほっと、一息つく。
だが、その時…。

バリン！

突如、窓ガラスが割れ、そこから人が飛び出してきた。

「アンタ達、よるこんでる場合じゃないわよ！！私は第二試験官！みたらしアンコ！！次行くわよ次イ！！！！ついてらっしゃい！！！！」

突然、新たな試験官登場にア然としている…。

「…空気を読め」

（まっただくだな）

（あの人、勢いがナルトに似ているな…）

（美味しそうな名前だな）

若干変なことを考えている人物がいるとは露知らず、アンコは試験会場を見渡す。

「90人…！？イビキ！30チームも残したの！？今回の第一の試験…甘かったのね！」

「今回は…優秀そうなのが多くてな」

「フン！まあ、いいわ…次の『第二の試験』で半分以下にしてやるわよ！！ああ、ゾクゾクするわ！詳しい説明は場所を移してやるからついていらっしゃい！！！！」

「ここが『第二の試験』会場第44演習場…別名…『死の森』よ！」

アンコに連れて来られた場所は、薄気味の悪い森の前だった。あまりの薄気味の悪さに、ミミは背筋をゾクリとさせた。

「フフ…ここが“死の森”と呼ばれる所以外、すぐ実感することになるわ」

「『死の森と呼ばれる所以、すぐに実感することになるわ』なーんておどしても、ぜんっぜんへーき！怖くないってばよ！」

「またあのバカ野郎は…」

「そう…君は元気がいいのね」

その時…

シュバ、シュ！

アンコは、ナルトの頬をクナイで傷つける。

「アンタみたいなのが真つ先に死ぬのよねえ。フッフ…私の好きな赤い血をぶちまいてね」

(怖!!あの人怖!!!)

ナルトの頬から流れる血を舐めるアンコに恐怖するミミ。

「クナイ…お返ししますわ…」

「わざわざありがとう」

突然、アンコの背後から舌の長い人物が現れ、クナイをアンコに返した。

「でもね…殺気を込めて…私の後ろに立たないで。早死にしたいわなければね…」

「いえね…赤い血を見るとついウズいちゃう性質でして…それに私の大切な髪を切られたんで興奮しちゃって…」

「どうやら今回は血の気の多い奴が集まったみたいね…フッフ…楽しみだわ…」

(アンコさんも充分血の気が多い気が…)

「アンタも人のこと言えねーよ、自分自身のことも理解できないのか？頭開いて脳みその小ささを確認したいもんですね」

「シミズ……！！！！」

またしてもシミズの毒舌に頭を抱えるミミとカノン……。だが、言われている本人はシミズの言葉に耳をかさず、紙をみんなに配り始める。

「同意書よ。これにサインをしてもらおうわ」

「何だ？」

「……こつから先は死人も出るから、それについて同意をとつとかないかね！私の責任になっちゃうからさ」

（し、死人！？とんでもないこと言い出しやがったぞあの試験官！？）

（……キバやシカマルのチーム……大丈夫かな……）

アッコの言葉を聞いて、キバやシカマル達のが急激に心配になったミミであった……。

「まず第二の試験の説明をするから、その説明後にこれにサインして班ごとに後ろの小屋に提出してね。じゃ、第二の試験の説明を始めるわ。早い話ここでは極限のサバイバルに挑んでもらおうわ」

（サバイバルかよ。またクソめんどくせー試験だな！）

「……………」

「どつしたシミズ？」

同意書を見つめるシミズに気づいたカノンが声をかける。

「いや…この同意書は必要ないと思ってな…俺は絶対死なねーし、お前らもみすみす殺させはしねーしな…」

「シミズ…」

普段は毒舌ドSなシミズだが、意外と仲間思いだ。

シミズはそんなシミズの言葉に嬉しそうな表情をする。

「……………」

「なーによシカマル。シミズさん達の方を見て…さてはアンタ、シミズさんに嫉妬してるわね？」

シミズ達とのやりとりを見ていることに気づいたのがニヤニヤしながらそう言う。

「あ？何言ってたんだ？」

「またまた…。シミズさんがシミズさんにあんな嬉しそうな表情を見せることに不満を感じたんでしょ？」

「なんで俺がそんなこと思わにやなんねーんだよ、めんどくせえ…」

(…自覚なしってところかしら…)

そんなやりとりがあった後、試験の説明内容を聞かされた。

ルールは、44個ある各ゲートから一斉に演習場に入り、演習場内

で二種類ある巻物の争奪戦を行う。なお、各チームに最初の時点でどちらかの巻物が渡されている。

合格条件は、5日間以内に二種類の巻物を持って中央にある塔まで3人でたどり着くこと。

失格条件は3つ。

- ・ 時間内に二種類の巻物を塔まで3人で持って行けなかったチーム
 - ・ 班員を失ったチーム、又は再起不能者を出したチーム
 - ・ 巻物の中身は塔の中にたどり着くまで決して見てはいけない。
- …以上が、この第二の試験のルールだ。

「最後にアドバイスを一言……死ぬな！」

アッコがそう言うと、緊迫した空気が流れた。

そして下忍達は、同意書と引き換えに巻物を受け取った。

「皆、担当の者についてそれぞれのゲートへ移動！これより30分後に一斉スタートする！！」

「30分後って、思ったより長いね」

「時間が経つまでどうする？」

「毒舌30分耐久がやりたい」

「却下。てかなにそれ」

そうこうしている内に、30分はあっというまに過ぎていった…。

「これより中忍選抜第二の試験！開始！！」

アノコがそう言ったと同時に、下忍達は死の森へと足を踏み入れたのだ…。

「うわぁ…やっぱり薄気味悪いなあ…」

「げっ…あれ、毒蛇じゃないか…？」

「よし、カノン。噛まれてこい」

「なんで!？」

「噛まれて不様に苦しむカノンが見たいから」

「ふざけんな!…てかさつき、『お前らもみすみす殺させはしねーし』…とか言ってたよな!？」

「あきらかに守る気がないよねそれ…」

ヤイバ班はシミズのとんでもない発言を聞きながら死の森を走り抜けるのだった。

果たして第二の試験、巻物争奪戦を、ミニ達は勝ち残ることができ
るのでしょうか…

第10話「第二の試験開始」(後書き)

なんか中途半端な所で終わった気がする…。

次回、ミミがシミズ達と別行動。

ミミの見た光景とは…！？

第11話「木の葉VS音」

「だいたいこれくらいで良いかな…」

シミズとカノンと別れ、それぞれ食料集めをしながら塔の近くまで行くことになった。

今ミミは、茶々丸とともに食料集めをしている。

「さて、食料集めも終わったし、先に進むよ茶々丸！」

「ワン!!」

そう言うと、ミミは茶々丸とともに塔の方角を目指した。茶々丸の頭を優しくなでながら歩いていく。

(キバとシカマルは大丈夫かな…)

ミミの頭に浮かぶのは、愛しの弟と想い人。彼等は自分達と違い、まだ下忍になったばかり…ミミの不安は大きくなる一方である…。

ミミの考えを察したのか、茶々丸はミミを安心させるように足元にすりより、「ワンワン!!」と元気良く鳴いた。

自分を慰めようとする茶々丸を見て、ミミは笑顔になる。

「そうだね…私が心配したって何も変わらない…大丈夫、キバは私と同じでサバイバルが得意だし、シカマルも頭良いから、きっとこの厳しい試験を乗り越えられるよね…！」

「ワウン…！」

いつも通り元気になったミミを見て、茶々丸は尻尾を振って喜んだ。

「さて、早いところ塔の方に…！」

クンクン…

「……………この匂いは…茶々丸…！」

「ワン！ワン！」

ミミは茶々丸と共に、自身が感じとった匂いの元へと駆け出した。

(…やっぱり…シカマル達だ…)

前方にシカマル達を発見し、気配を消し距離をとる。

(いったい何を見て…!!)

シカマル達が見ている方角を見ると、ナルトとサスケ、リーが倒れていて、サクラは音忍の女に髪を掴まれていた。

(サクラちゃん!? てか、なんでリーが倒れてるの…!!?)

シカマル達の後ろからその状況を見たミミは混乱していた。

(と、とりあえず… 助けた方がよいよね… けど、一人で突っ込むのは危険だよね…)

ミミが心の中で葛藤していると…

ザン!

サクラは、クナイで自分の髪を戸惑いなく切る。そうすることで、音忍の女の手から抜け出す。

サクラは倒れているリー達の前に立つ。

その背中が、どこか心強いようにミミの目には写った…。

「このガキイ!」

音忍の男がサクラに攻撃を仕掛けようとするが…

ザッ!

(…いのちゃん…)

いのがサクラの前に立つ。

いのに続き、シカマルがチヨウジを連れて、サクラの前に立つ。

「ふ…二人とも、何考えてんだよ〜！コイツらヤバすぎるって！食われるって！シカマル…、マフラーはなしてよ〜！」

チヨウジは泣きながらそう言うが、シカマルはマフラーを放さない。

「放すか、バカ！めんどくせーけど、しよーがねーだろ！いのが出ていくのに、男のオレらが逃げられるか！」

(シカマル…)

シカマルの言葉に、ミミは不謹慎だと思いつつも、思わずクスリと笑った。

「巻き込んだじゃってゴメンねー！だけど、どーせチーム同士…運命共同体じゃなーい！」

「ま、なるよーになるさ」

「クク…。お前は抜けたっていいんだぜ。おデブちゃん」

音忍の言葉に、チヨウジはピクリと反応する。

「え？いま、何て言ったの、あの人…。ボク…、あまり聞き取れなかったよ…」

チヨウジの様子にミミは首を傾げる。

「嫌ならひっこんでろつつたんだよ、このデブー!!」

「ボクはデブじゃない!!!ポツチャリ系だ!コラー!!!」
突然怒りだしたチョウジにギョツとするミミ。

「うオオオオオ!!!ポツチャリ系、バンザイ!!!」

(チョウジに『デブ』は禁句みたいね…性格変わってるし…)

「よーしい!お前ら、分かってるよな!これは木の葉と音の戦争
だぜえ!!!」

「ったく、めんどくせーことになりそうだぜ」

そう言うとシカマルは、チョウジのマフラーを放した。

「サクラ…」

「!」

「後ろの二人…、頼んだわよ。」

「うん…!」

「それじゃ、いのチーム、全力で行くわよー!」

「おっ!」

(…少し様子見しておこうかな…頑張っ、シカマル…)

ミミは、シカマル達の戦いを見守ることにした。

「フォーメーション、猪鹿ちよーう！チヨウジ、頼んだわよー！」

「オーケーー！！（倍化の術！！）」

チヨウジは印を結び、ボン！と体をボールのように大きくする。

（続いて、木の葉流体術・肉弾戦車！！）

顔と手足を体の中に入れ、ゴロゴロと回転していった。

「！なんだ、このヘンテコな術は…。フン！！デブが転がってるだけじゃねーか」

（あのチヨウジの技：かなり威力あるな…当たったら人溜まりもないかも…）

チヨウジの技を見てそう思うミミ。

音忍はチヨウジに向かって術をかける。

しかし、激しく回っているチヨウジはノーダメージ。

急停止すると、飛び上がった。

「…！何イ！？跳ねやがった」

包帯を巻いたもう一人の音忍が助けに向かおうとする。

（よし！忍法・影真似の術！！）

シカマルの影が包帯男の影を捕らえる。
チヨウジは男に直撃するが、避けられた。

「いの！あとはあの女だけだ」

「うん！シカマル、私の体もお願いねー！」

いのは印を組む。

（忍法・心転身の術！！）

突然、いのがふらつと倒れこむ。

倒れかけてたいのの体を、シカマルが支える。

（シカマルに支えられてる…羨まし…て違う！！いのちゃん、いつ
たいどうなって…）

「これでおしまいよ！」

音忍の女からいのの声が出た。

ミミはそのことにビックリするが、それよりも、シカマル達のコン
ビネーションに目を輝かせる。

（これがフォーメーション、猪鹿蝶…コンビネーション抜群じゃん
…！！）

「アンタたち！一歩でも動いたら、このキンって子の命はないわよ
ー！アンタたちのチャクラの気配が消え次第、この子は解放したげ
る！ここで終わりたくなければ、巻物を置いて、立ち去るのね！」

(……………?)

状況は明らかにシカマル達が優勢なのに、音忍の男二人はニヤニヤしている。

(…嫌な予感がする…)

「…!!ヤバイ、そいつらは…!!」

サクラが言い終わる前に、男が攻撃をしかけようとする。

「危ない!!!」

ミミは男の攻撃が当たる前に、素早くてその精神が入っているキンの体を担ぎ、攻撃を避ける。

「!?!?ミミ!?!?お前、なんでここにいるんだ!?!?」

突然のミミの登場に驚くシカマル。

声には出していないが、サクラ達も驚いた顔をしていた。

「そんなことどうだって良いよ!!それよりも…あなた達、正気じゃないわ…仲間をなんだと思ってるの…!!」

「フン…油断したな」

「我々の目的は、くだらぬ巻物でもなければ、ルール通り無事、この試験を突破することでもない…」

「…?!」

「サスケ君だよ！」

「「「「！！！！」」」」

その時、男の影と繋がっていたシカマルの影が離れる。

(シカマルの影真似はもう限界みたい…)

「その子の術…、相手の精神に自分の精神を潜り込ませ、体に乗っ取る術のようですが…おそらく、キンを殺せばその子も死ぬだろうね」

(こいつ…！)

包帯男の言葉に、ミミは沸々と怒りが込み上げてくる。

「フン…気にいらぬ…」

ミミはよく知る人物の声を聞き、振り向くとそこにはネジとテンテ
ンがいた。

「マイナーの“音忍”風情が…そんな二線級をいじめて、勝利者
気取りか」

「コラ、ネジ。一生懸命戦ってる皆に対して失礼だよ！労いの言葉
くらい素直に言いなさい。『お疲れ様』とか、『頑張ったな』とか
…ね？」「

(ね？っじゃねーよ！！何言ってるんだよこんな時に！！)

シカマルは心の中でツツコム。

ミミの天然混じりな発言があったものの、皆に緊迫した空気になる
…その時。

ムクツと、サスケが立ち上がった。

「！！サスケ君！！目が覚め…」

サクラの言葉が途中で詰まったことを不思議に思ったミミは、サスケの方を見ると、ミミは目を見開いた。

…サスケの体に、異様な模様がついていた。

「サクラ…誰だ…。お前をそんなにした奴は…」

「…サスケ君…」

「どいつだ…」

「オレらだよ！」

音忍の男が答える。

「サスケ君…その体…!？」

「心配ない…。それどころか、力がどんどんあふれてくる。今は…
気分がいい…。あいつが、くれたんだ」

「え？」

ミミは、リーとの対決を見ただけで、サスケのことをよく知らない。

だが、今日の前にいるサスケの様子が明らかにおかしいのは嫌でも分かった。

「…オレはようやく理解した。オレは復讐者…。たとえば、悪魔に身を委ねようとも、力を手にいれなきゃならない道にいる…。さあて…、お前だったよな」

「いの！そのカツコじゃまきぞえだぞ！元の体へ戻れ！！チヨウジとミミもこっちに来い！」

「わっ！」

シカマルはミミの手を掴み、草影に隠れる。

(ヤ…ヤバイ！！解！！)

印を結ぶと、いのは自分の体に戻る。

いのが無事だったことに、ミミは一安心する…しかし、相変わらずサスケの様子はおかしかった。

「ドス！こんな死に損ないに、ビビるこたあねえっ！！！」

「…よせ！ザク！分からないのか！」

ザクと呼ばれた音忍の手がサスケを狙う。

ゴオーツ！！

草影に隠れているミミたちも吹き飛ばされそうになるほど、激しい風が吹き荒れる。

だが、サスケはそれを避け、ザクを殴る。

(っ…強い…!!)

音忍はサスケに完全に押されている。

サスケはザクの背中に回り込み、両腕を後ろに回され、背中を足で抑えつける。

「クク…、お前、この両腕が自慢なのか…」

(!?!?何をする気なの…!!?)

サスケの言葉を聞いて、嫌な予感がするミニミ。
その時…。

ゴキッポキッと、嫌な音が響き渡った…。

第11話「木の葉VS音」（後書き）

またしても中途半端な所で終わってしまった…。
ミミがちよつと天然キヤラになってましたね…。
次回、ミミに新しい友達が…！？

第12話「砂の友達」

ミミは目の前で起きた出来事に、少なからず驚いていた。
サスケが、敵とはいえ容赦なくザクと呼ばれた男の腕を攻撃する。
そんなサスケに、ミミは多少の恐怖を覚えていた。

「残るは、お前だけだな…」

包帯を巻いた男、ドスを見てそう言うサスケ。

「お前はもつと楽しませてくれよ…」

(あの…首から浮き出てる印みたいなもの、のせいなのかな…)

少し警戒しながら、その様子を見ていると…。

「やめてー!」

サクラがサスケに抱きついた。

「おねがい…やめて…」

(……………)

(！！印が消えていく…)

サスケの体から浮き出ていた印がスウ…と消えていく。

サクラの声が届いたのだ…。

ドサツと、サスケは倒れこんだ。

そんなサスケをサクラは支える。

「君は強い…」

「！！！」

「サスケ君、今の君は、ボクたちでは到底倒せない。これは手打ち料…。ここは、退かせて下さい」

そう言つてドスは“地の書”を置いた。

「虫が良すぎるようですが…ボクたちにも確かめなきゃいけないことができました。そのかわり、約束しましょう。今回の試験で次、アナタと闘う機会があるのなら、ボクたちは逃げも隠れもしない…」

ドスは倒れているザクとキンを担ぎ、その場から立ち去ろうとする。

「待つて！！大蛇丸つて、一体何者なの？サスケ君に、何をしたのよ！なんでサスケ君に！！」

「分からない…。ボクらはただ…、サスケ君を殺るように命令されただけだ」

そう言つと、そのまま去つていった。

(話がまったく見えない…飛び入り参加の部外者だし、当然か…)

「おい！大丈夫かよ、お前ら！！めんどくせーけど、いのはリーって奴、頼む！」

その時、倒れていたサスケが意識を取り戻す。

サスケは自分自身を、不思議そうに見つめていた。

あと、意識がないのは、ずっと蚊帳の外だったナルトだけ…。

「シカマル…ナルトがまだ起きないけど…」

「どーするか、コイツ！ケリ起こすか!？」

「ボクがやっていい？」

そう言つとチョウジは、どこからか持ってきた木片でナルトの頭を思いきり叩く。

ドカッ！

「ぎゃあああ！！はっ！」

(結構容赦なかったな…)

頭に一つたんこぶができているナルトを見て、苦笑いするミミ。

「みんな、隠れろー！！いや、すぐふせろー！！」

ナルトは、あたりを見回した後そう叫び、地面に這いつくばる。

「あ…、あいつはどこだつてばよ…!」

ナルトの忙しい反応に、思わず目をパチクリさせるミミ。シカマルに至つては、呆れた様子でナルトを見ていた。

「…………ふ、あはははは…!ナルトつて、凄い天然君だね!…ははは…!」

「わ、笑いすぎだつてばよ…!」

「ああ、ごめんごめん…!」

いまだにニコニコと笑うミミを、ナルトはジッと見る。

「…………ミミつて、笑った顔、結構かわいいつてば…」

「え?」

ナルトの大胆発言に、ミミが再び目をパチクリさせる。

ゴンツ!

「いてえ…!何するんだつてばよシカマル…!」

「いや…なんとなく…」

「なんとなく殴つたのか!?さっきよりは痛くなかったけど酷い

つてばよー!」

(シカマル、絶対に嫉妬してるわ…)

「あー! サクラちゃん!」

「!...何よ!」

シカマルに叩かれて文句を言った後、ナルトはサクラとサスケに近づく。

「サクラちゃん、その髪!」

ナルトは、サクラの髪が短くなっていることに気づく。

「あ! コ...、コレね...。イメチェンよ! イメチェン! 私は長い方が好きんだけど、ホラ...、こんな森じゃあ動き回るのに、長いと邪魔なのよね!」

「ふうーん」

納得したナルトが、もう一度シカマルを見る。

「ところで...、何でお前らこんなとこにいらだつてばよ!？」

「ふー...、お前に説明すんのがめんどくせー!」

「みんな、助けてくれたのよ」

と、サクラが言った。

「あはは…（私はいのちゃん助けたこと以外何もやってないけどね…）シカマル」

「あ？」

「私、そろそろ行くね。これ以上時間くって、シミズ達に迷惑かけるわけにわいかないからさ…じゃあね!!」

「シミズは返答も待たずに、茶々丸とともにその場を素早く去っていった…。」

「さて、さっきの戦いで時間くっちゃったしな…とりあえず塔の方へ向かおうかな…シミズ達もきつと向かってるはずだし…」

「そう言つとシミズは走って塔の方へ向かう。」

「しばらく走っていると、近くに知らない匂いを感じとる。」

「……………誰？」

「シミズは警戒しながら、匂いのする方向に向かって喋る。」

「…気配は消してたつもりなんだけどなあ…アンタもしかして、感

知タイプ？」

現れたのは、クリーム色の髪をリボンで二つ結びをしている、ミミより背が低めの女の子だった。

…額宛は砂時計の形をしていた。

「あの額宛のマーク…砂隠れの里…テマリさん達と同じ砂隠れの忍だね！！」

少女は『テマリ』という言葉に、耳をピクリと動かす。

「…テマリ達…砂の三姉弟と知り合いなの？」

「うん！そうだよ！！あ、そうだ！！アナタの名前は？私は犬塚ミミ…！よろしくね！！」

ニコリと笑い、少女の方へ手を差し出す。

「…あのさ、アタシら敵同士だよな？何フツーに握手求めてんの？」

「確かにそうなんだけどさ、テマリさん達の知り合いなら友達になりたいなって思ったの！…それにアナタ、今巻物持ってないでしょ？」

「…！！…よく分かったわね…」

「巻物持った人が一人でいるのは危険だし、にしては周りに仲間の匂いがしないから…」

『ちなみに私も持ってないよ』っと、笑いながら少女に言うミミ。少女はそんなミミにクスリと笑う。

「変わってるわねアンタ……………ユキ」

「え？」

「アタシの名前…ユキって言うのよ。まあ、よろしく」

素直に名前を覚えてくれたことを嬉しく思った。

そのまま握手するために、ユキに手を差し出すが、ユキは握手をしてくれなかった。

「?…ユキちゃん？」

「さっきも言ったけど、アタシ達は敵同士よ…」

ユキにそう言われ、悲しそうな表情をするミミ。

「…中忍試験が終わったら、いくらでも握手してあげるわよ…だから、そんな悲しそうな顔をしないの」

「!?!…うん!?!」

先程の悲し気な表情が嘘のように、満面の笑みを浮かべた。

「アンタは巻物持ってないみたいだし、仲間元に行くわ。…ミミ! 次の試験で…会いましょう!」

「もちろん!?!」

そう言っただけは、ミミの前から姿を消した。

「ふふ！新しい友達ができて嬉しいな！！」

「何笑ってんだよミミ」

「うわぁ！！」

いきなり後ろから声をかけられ、ミミはビクリと肩を震わせた。すぐさま後ろを振り向くと、シミズとカノンがいた。

「シミズ！カノン！」

「油断しすぎだ馬鹿。死にたいのか？」

「うっ…ごめん」

ミミは縮こまり、しゅんとした表情で下をつつむいた。

「そんな表情しなくていいだろ？元気出せよ」

「カノン嫌い」

「何でだよ！？慰めてるだけだろ！！」

「そんなことは置いといて…」

「俺そんなこと扱いかよ…」

「これ見ろよ」

シミズが取り出したのは巻物。しかも、それはただの巻物ではなくて…。

「そ、それって…!!天の書!？」

そう…今、シミズ達が探していた天の書だった。

「さっき偶然カノンと合流した後、天の書を持った奴等に出くわしてな…奪ってきてやったぜ」

シミズは得意気に話すと、天の書をポーチに入れた。

「さあ、後は塔の方へ行くだけだ…行くぞ!」

「ああ!」

「うん!」

「ワンワン!!」

そう言うと、三人と一匹は塔を目指し、森の中を駆け出した…。

第12話「砂の友達」(後書き)

シミズ達と合流!!

なんかいつも以上にグダグダした気がします…。

次回、中忍の心得と本当の目的を知る。

第13話「中忍の心得と試験の目的」

あれから、敵の攻撃を退けながら塔へと進んでいるミミ達。そしてついに、二つの巻物を手に、塔へ到着した。

ミミ達は扉を開け、中に入るが、中には誰もいなかった。

「あれ？誰もいないよ？」

「おかしいな…」

「二人とも、あの看板を見る」

シミズに言われ、二人は看板の方を見ると、そこにはこう書かれていた。

『“天”無くば、智を誠り機に備え“地”無くば野を駆け利を求めん
天地双書を開かば危道は正道に帰す　これ則ち

“ ”の極意：導く者なり　三代目』

「うん。難しいな…あれ？なんか抜けてる文字があるよ？」

「それについてはこの天の書と地の書を開けば分かる」

そう言つてシミズは巻物を取り出し、カノンと一緒に巻物を開く。そこに書かれていたのは“人”という字だった。

「両方同じだね」

その時、シュウウーっと、巻物の“人”の字から煙があがる。

「え！何！？」

「口寄せの術式だ」

シミズとカノンは巻物を放り投げる。

やがて煙がなくなると、そこには人が立っていた。その人物とは…。

「…建物の中…と、いうことは、合格したんだなお前ら…よくやったぞ！」

「「ヤイバ先生！？」」

ミミ達の担当上忍、ヤイバが巻物から口寄せされたのだ。

「どうしてヤイバ先生が…」

「俺達が途中で巻物を見た時に、何かするつもりだったんだろ」

ヤイバはシミズの答えにニヤリと笑う。

「…もし、お前らが試験途中に規則に反する条件で巻物が開かれた場合…その目の前の受験者には、“第二の試験”終了時刻まで、気絶してもらおうよう命じられてた」

「なるほど…」

「ねえ、先生。あの虫食いになってる壁紙って、どういう意味なの？」

ミミはヤイバにそう尋ねる。

「それは火影様が記した“中忍”の心得だ」

「中忍の心得…？」

「…“天”は人間の頭、“地”は人間の体を指している…そんな所か？」

ヤイバはシミズの言葉に頷く。

「“天無くば智を織り機に備え”…弱点が頭脳にあるならば、『様々な理を学び任務に備えなさい』…つという意味で…“地無くば野を駆け利を求めん”…弱点が体力にあるなら、『日々鍛練を怠らないようにしなければなりませんよ』…つという意味だ」

「そんな意味があつたのか…」

「そして、その天地両方を兼ね備えれば、どんな危険に満ちた任務も正道…霸道ともいえる安全な任務になりえる」

「だとすると、あの抜けた所に入る文字は…」

「そうか！巻物に書いてあった“人”の字だ！！」

カノンはスッキリした顔でそう言うが、そんなカノンをシミズは睨み付ける。

「今俺が言おうとしたこと先に言うな。カノンのくせにふざけんな」

「え！？俺が悪いの！？」

相変わらずのやり取りに、ヤイバはくくく…と笑う。そしてまた口を開いた。

「五日間のサバイバルは、受験生の中忍としての基本能力を試すためのもの…。中忍とは、部隊長クラス…。チームを導く義務がある…。任務における知識の重要性、体力の重要性をさらに心底心得ること。この“中忍心得”を決して忘れず、次のステップに挑んでほしい。お前ら…次の試験も頑張れよ！！」

「…はい！！」「…」

三人のはっきりした返事に、ヤイバは安心したように微笑む。

「次の試験、俺はお前らの戦いぶりをしっかりと見せてもらうからな。あんま下手な戦いはするなよ」

「え？先生、私達の戦いを見るんですか？」

「俺だけじゃない。他の班の上忍達も見に来るぞ。恥をかかないよ」

うに……気を……つ……」

「……………先生？」

段々と声が小さくなっていくヤイバに、ミミは首を傾げる。

「……………まさか……」

「ああ……」

「……………ぐう……」

「「やっぱり寝てた……！……！」」

そう……ヤイバは器用なことに、立ったまま寝ているのだ。
ヤイバは寝ることが好きだ。

話してる途中で寝ることもよくある。

このことはヤイバ班にとっては日常茶飯事になっていた。

「相変わらずだな先生……」

「うわ、寝ながら歩いてる……」

「いつ見ても凄いな……」

三人は、そんな自分達の先生に慣れてはいるものの、ため息をつか
ずにはいられなかった……。

やがて、ナルト達の班も到着し、これで第二の試験の通過者が全員揃った。

「お、今年のルーキー、全員合格してるじゃねーか」

「随分優秀な奴らが入ってきたもんだな…」

（キバのチームも、シカマルのチームも、ネジ達のチームも残ってる…テマリさん達も…あ！ユキちゃんのチームもいる…！）

この場にいる下忍のチームは9つ。

アノコが、そんな下忍達に向かって口を開いた。

「それではこれから、火影様より“第三の試験”の説明がある。各自、心して聞くように！！では火影様、お願いします！！」

「うむ。これより始める“第三の試験”。その説明の前に、まず一つだけ…。はつきりお前たちに告げておきたいことがある…！！」

（なんだろ…？）

「…この試験の真の目的についてじゃ」

（真の目的？）

「何故…同盟国同士が試験を合同で行うのか？」

(どういうことだ？)

(……………)

「 同盟国同士の友好 ” 忍のレベルを高めあう ” その本当の意味をはき違えてもらっては困る…！…この試験は言わば、同盟国間の戦争の縮図なのだ 」

火影から放たれた言葉にみんなが驚く。

「 ど…どういうこと…？ 」

「 歴史をひもとけば今の同盟国とはすなわち…かつて努力を競い合い続けた隣国同士。その国々が互いに無駄な戦力の潰し合いを避けるために敢えて選んだ戦いの場…それがこの中忍選抜試験のそもそもの始まりじゃ…！ 」

「 な…なんでそんなことしなきゃなんねえんだってばよ…中忍を選ぶためにやってんじゃねーのかよ！ 」

(確かに、ナルトの言う通りだよ…)

火影の言葉にそう言うナルトに、ミミは密かに頷く。

「 確かにこの試験が中忍に値する忍を選抜するためのものであることと否定の余地はない…だがその一方でこの試験は…国の威信を背負った戦う場であるという側面も合わせ持つ！ 」

(思った以上にでかい目的があるんだな…)

「この“第三の試験”には我ら忍に仕事の依頼をすべき諸国の大名や著名な人物が招待客として多勢招かれる。そして何より各国の隠れ里を持つ大名や忍頭がお前たちの戦いを見ることになる」

（なるほど…読めてきた…だから任務などの成功率とかで中忍を決めず、わざわざ試験という形にしたんだな…なら、仕方ないか…）

「国力の差が歴然となれば“強国”には仕事の依頼が殺到する。“弱小国”と見なされればその逆に依頼は減少する」

（頭が痛くなるような話だなあ…）

「そしてそれと同時に隣接各国に対し“我が里はこれだけの戦力を育て有している”という脅威、つまり外交的…政治的圧力をかけることもできる」

「だからってなんで！命懸けで戦う必要があんだよ…！？」

それでもナルトは納得がいかないらしい。

「国の力は里の力…里の力は忍の力…そして忍の本当の力とは、命懸けの戦いの中でのしか生まれてこぬ…！」

受験生達の間で緊張がはしる。

「この試験は自国の忍という“力”を見せてもらう場であり…見せつける場でもある。本当に命懸け戦う試験だからこそ意味があり、だからこそ先人たちも“目指すだけの価値がある夢”として中忍試験を戦ってきた」

「ではどうして…“友好”なんて言い回しをするんですか!？」

「だから始めに言ったであろう!意味をはき違えてもらっては困ると。命を削り戦うことで力のバランスを保ってきた慣習、これこそが忍の世界の友好的なのじゃ」

(物騒な友好関係だなあ…)

「第三の試験前に諸君にもう一度告ぐ。これはただのテストではない…これは己の夢と里の威信を懸けた、命懸けの戦いなものじゃ」

「なんだか凄いな…」

「そんな意味があつたなんてな…」

「フム…ではこれより“第三の試験”の説明をしたい所なのじゃが…実はのオ…ゴホン」

どことなく申し訳なさそうな火影の様子にミニ達は首を傾げる。すると、男の人が火影に近づく。

「…恐れながら火影様…ここからは“裁判”を仰せつかったこの…月光ハヤテから…」

「…任せよう」

「皆さん初めまして。ハヤテです。えー皆さんには“第三の試験”前に…やってもらいたいことがあるんですね…ゴホッゴホッ」

「え、あの人大丈夫なの?体調悪そう」

「…………俺、胃薬しか持ってねエ…………」

さりげなくそう囁いたカノンの言葉に、ミミは同情の視線を送っていた。

「えー…それは本選の出場を懸けた“第三の試験” 予選です…」

「!?!」

ハヤテの口から出た言葉に、下忍達が動揺する。

「予選って…、どついうことだよ!?!」

「先生…、その予選って、意味がわからないんですけど…。今残ってる受験生で、なんで次の試験をやらないんですか？」

みんなこのことに納得がいていないようだ。

「えー、今回は…、第一・第二の試験が甘かったせいかな…少々人数が残り過ぎてしまってますね…。中忍試験規定にのっとり、予選を行い…“第三の試験” 進出者を、減らす必要があるのです」

下忍達は啞然とする。

「えー、それでは、体調のすぐれない方…、これまでの説明でやめなくなつた方、今すぐ申し出て下さい。これからすぐに、予選が始まりますので…」

「!?!?!これからすぐだと!?!」

サスケはアザのある場所をおさえてそう言う。

あの場にいたミミは、そんなサスケの様子に少し心配になった。ハヤテが辞退を呼びかける。

サクラがサスケに何か言っている。

「うちはサスケ…あいつ、どうしたんだ？」

サスケの様子に気づいていたシミズが疑問を口にする。

「サスケの首に、変なアザがあるの…」

「アザ？」

「あのアザが広がった時のサスケ…なんだか怖かった…」

「……………」

シミズはミミの頭を撫でる。

「…何かあれば、俺が守る…チームメイトに手を出す奴は、誰であらうと容赦はしない…」

「シミズ…」

いつもと違い、優しく頭を撫でるシミズの手には、ミミは安心した表情を見せた。

そんなミミ達を、シカマルが複雑な表情をして見ていたことは、誰も知らない…。

その後、薬師カブトが辞退を宣言する。
カブトが辞退することにナルトは残念そうにする。
立ち去るカブトを、シミズは疑い深い視線を送っていた…。

「えー、ではこれより、予選を始めますね。これからの予選は、一対一の個人戦。つまり、実践形式の対戦とさせていただきます。ちょうど28名なので、合計14回戦行い…、えー、その勝者が“第三の試験”に進出できますね。ルールは一切無いです。どちらか一方が、死ぬか倒れるか…あるいは、負けを認めるまで闘ってもらいます。えー、死にたくなければすぐ、負けを認めて下さいね。ただし、勝負がはつきりついたと、私が判断した場合、えー、むやみに死体を増やしたくないので、止めに入ったりなんかします。そしてこれから君たちの運命を握るのは…」

その時、今まで隠れていた電光掲示板が、姿を現した。

「これはですね…。えー、この電光掲示板に…、一回戦ごとに対戦者の名前を、2名ずつ表示します。ではさっそくですが、第一回戦の2名を、発表しますね」

電光掲示板が動き出す。

みんなに、緊張の糸がはしる…。

そして、電光掲示板の動きが止まる…そこに表示された2名は…。

『ウチハ・サスケVSアカドウ・ヨロイ』

“ 第三の試験 ” 予選、開始…！！

第13話「中忍の心得と試験の目的」(後書き)

長いセリフが多い話ですね。

てか、ヤイバ先生

相変わらずシミズの出番多めだなあ…。

次回、中忍試験予選試合、開始！！

第14話「予選開始」

電光掲示板に映された2名に、うちはサスケの名前が出されていた。

「いきなりうちはサスケの試合か…」

カノンがそう囁く。

「では、掲示板に示された2名、前へ…。第一回戦対戦者、赤胴ヨロイ、うちはサスケ。両名に決定…。異存は、ありませんね」

「はい…」

「ああ…」

「えー、ではこれから、第一回戦を開始しますね。対戦者2名を除くみなさん方は、上の方へ移動して下さい」

ハヤテの指示に従い、上の階へ移動する。

「それでは…、始めて下さい！」

ハヤテの言葉を合図に、二人は戦闘に入る。

(意外と大丈夫そうかな…?)

そんなミミの思いもつかの間…。

突如、サスケはグラついてしまい、倒れこむ。

ヨロイが殴りつけるが、間一髪で避けた。

(やっぱり、首筋が痛むんだ…)

(不調な体でどう戦う。うちはサスケ…)

サスケは、持っていたクナイを地面に突き刺し、ヨロイを押し倒す…しかし、ヨロイはサスケから振り逃げてしまった。

(な…何だ。急に、体の力が…)

「どうしたんだろ？サスケ」

「あのヨロイという男…もしかして…」

ユキの班の中性的な顔たちをした緑色の髪の少年が、サスケの様子を見て何かに気がつく。

「何か分かったのホシ？」

少年、ホシはユキの言葉にこくりと頷く。

「おそらくヨロイは…うちはサスケのチャクラを奪ったんだ…」

「チャクラを奪う技…厄介ね」

思ったよりも苦戦しているサスケ…そんな中、ナルトがサスケに向かって叫ぶ。

「サスケエー！！てめーはそれでも、うちはサスケかあ！！ダッセー姿、見せんじゃねエー！！！」

サスケはハッと、ナルトの方に目を向ける。
サスケの目に、隣にいるリーが映る。

（そうか…！）

「よそ見してる暇なんて、無いだろう！！」

ドカツ！！

サスケが、ヨロイを蹴りあげた。

「もつとも、ここからはオレのオリジナルだけだな…」

「くっ…、影舞葉だと…！」

「くらえ！」

その時、首筋にあった黒いアザが、サスケを取り巻くように広がっていた。

（またあのアザが…）

だが、サスケは自分の力で、取り巻いていたアザをおさえこむ。

シュウウ…と、退いていき、アザは見えなくなった。

「いくぜ」

「！！くっ…」

バシッと、蹴りつけるが止められる。

「フッ…。甘いな！」

サスケの追撃は止まらない。

「獅子連弾！！」

勢い良く、ヨロイを地面に叩きつける。

…勝負がついた。

「これ以上の試合は、私が止めますね…。よって、第一回戦、勝者
うちはサスケ。予選通過です！」

「やったー！！」

サスケの勝利に、ナルトは嬉しそうに声をあげる。

(アザも消えたし…なんかホッとしたよ……ん?)

安心したミミの目に写ったのは、ユキと一緒に会場の外へ出るネジ

の姿…。

(なんだろ…?)

気になったミミは二人の後を追うことにする。

「あ?どこに行くんだ?ミミ姉ちゃん?」

どこかへ行くこうとするミミに、キバは声をかける。

「まあ…ちよつとね…あら?」

電光掲示板に、第二回戦の2名が示される。

第二回戦…『ザク・アブミVSアブラメ・シノ』。

「シノ…て、キバのチームの…」

ミミはシノの方を向く。

「ああ…次はオレの番だ…」

「そっか!!頑張って勝ってね、シノ!!」

「…そのつもりだ」

ミミはしっかり弟のチームメイトに応援の言葉を贈ると、ネジとユキの後を追った…。

…ネジとユキが…キスしたのだから…。

(え！え！何！？／／あの二人って、付き合ってたの…！？／／)

ミミの頭の中はパニック状態だ。

「ネジ…」

「ユキ…」

(はわわわわ！！！！／／／)

見ていて段々恥ずかしくなってきた、顔を赤くしたまま、その場から去っていった…。

ミミが戻ってきた頃には、決着がついていた。どうやらシノがザクに勝利したようだ。

「あ…、シノくんおつかれ…さま」

「やったな、オイ！」

「うむ…、お前たちにも、期待してるぞ」

(くっ……。こいつ、チームのリーダーみたいなノリで帰ってきやがって。くそっ！)

「その心配はないよ！！キバは私の自慢の弟だからね！！……あ！シノ、通過おめでとう！！」

キバの背中から現れ、そっぴい放つミニ。

「ミニ姉ちゃん！……なんか顔赤くね？」

「え……」

先程のネジとユキのキスを見て、まだ頬の赤みがとれてない状態でした。

「あ……気にしないで！大丈夫だから！！」

「ふっん……なら良いけど……」

誤魔化すように笑うと、シミズ達の元に戻って行った。

「どこ行ってたんだお前……」

「いや、まあ……いろいろ」

「意味分からん……」

「あ！三回戦の2名が決まったぞー！！」

三回戦……『ツルギ・ミスミVSカンクロウ』

「あ！カンク로우さんの試合だ！」

次の試合は、ヨロイと同じチームの男と、砂隠れのカンク로우だ。

「頑張つて、カンク로우さん！！」

カンク로우は、木の葉の忍なのに自分を応援するミミに驚いた顔をする。

まあ、当然の反応だろう。

当人のミミはニコニコしているだけだった…。

「それでは第三回戦、始めて下さい」

「オレはヨロイと違ってガキでも油断は一切しないぜ。始めに言っておく、オレが技をかけたら最後…必ずギブアップしろ。速攻でケリをつける」

「ならオレも…速攻でケリつけてやるじゃん」

トン

カンク로우が背中にしよっていた物を置いた。ミスマがカンク로우に向かっていく。

「何もやらせはしない、先手必勝！」

グルン

「！なに！？」

「なっ…!?!」

「やだ!何あれ!?!」

「……………気持ち悪っ」

ミスミはカンクロウに全身で巻き付いている。
端から見るとかなり異質だ。

シミズに至っては気持ち悪がっている。

「あらゆる間接をはずすことで体がグニャグニャになり、それをチヤクラで自在に操っている…どこでも忍びこめるあの体は、情報収集にはうってつけだな…」

ミスミの技を見て、冷静に分析するヤイバ。

「あんなにキツく絞められたら、最悪骨が折れる危険性がある」

「そんな…!?!」

「早くギブアップしろ」

「へっ、ヤダね」

「!死にたいのか…!」

「ぐっ…死ぬのはためーじゃん?」

ゴキ……………

「チィ…バカが…勢いあまって殺しちゃったじゃねーか…」

「うそ…首の骨が…」

ミミはショックを受けている。

だが、ホシはそんな様子を見て、目を細める。

「これは…あのミスミという男の負けだな…」

「え…？」

ホシの言葉が聞こえたミミは、疑問符を浮かべる。
その時…。

「じゃあ今度はボクの番」

「…!!…なに…!!？」

バツ!

ギリギリ…バリバリ

ギギギギ

「ぐっ、こ…これは傀儡人形…!!」

「あいつ…傀儡使いか…」

巻かれた包帯からカンクロウが出てくる。

本体は最初からそこに隠れていたらしい…。

「骨まで砕けばもっとグニャグニャになれるじゃん…」

「ぎ…ギブアツ……………」

バキッ！

「あぐわああああ」

「ただし…首以外にしといてやるよ」

圧倒的勝利だ…。

「試合続行不可能により勝者カンクロウ！！」

「傀儡の仕掛けをほとんど使わずに倒したな…砂の忍…強者だな…あれ？ミミ？」

ミミが砂隠れのチームの元に行くのを見たヤイバ。

カンクロウがステージから戻ってくるやいなや、好奇心旺盛な目で傀儡を見る。

「すごい！！ねえ、なんて名前の傀儡なの！？」

「あ…ああ…カラスってんだ…」

そんなミミに、少し苦笑いしながら言うカンクロウ。

「カラス…！！カッコいいね！カンクロウさんって、手先が器用な

んだね!!…あ、そうだ…カンクロウさん、通過おめでとう…!!」

ミミはカンクロウを見て、ニコリと笑う。

「…っ!! / / あ、ああ… / / /」

心なしか、カンクロウの顔が赤くなる。

そんなカンクロウに気づくことなく、ミミは元の場所に戻る。

「どうしたカンクロウ…顔が赤いぞ」

「…あいつって、あんな可愛かったんだな…」

「はあっ?」

もちろん、こんな会話がされていたことも知らない…。

「!…戻ってきたかユキ」

サスケの試合後、ネジと一緒に会場を出たユキが戻ってくる。

「遅くなったわね…」

「うふふ…彼氏さんとの再会がそんなに嬉しかったのかしら…」

髪の高い綺麗な女性がからかうように言う。

彼女はユキ達の担当上忍の先生である。

「からかわないで下さいよ、エルナ先生…」

「あら、ごめんなさい…」

顔は笑ったままでそう言うエルナ。
ユキは思わずため息をついた。

「ミミ姉ちゃん!」

「ん?どうしたのキバ?」

戻ってきたミミに、キバが駆け寄ってくる。

「姉ちゃん!あんまりあいつに近づかない方がよいぜ!」

「?あいつって…カンクロウさんのこと?」

「そう、そいつ!あいつ、絶対ミミ姉ちゃんに気がある…あの砂の忍だぜ!?変なことされるぞ!」

どことなく必死なキバに、ミミは首を傾げる。

「変なことって…カンクロウさんはただの友達だよ?」

「なんか勝手に友達扱いされてるぞ…」

カノンがそう言う。

「もしかして、私がかまってくれないから拗ねてるな…?もう!キバ可愛い!」

ミミは緩んだ顔でキバを抱き締める。

「ムギユー！く、苦しいって、ミミねーちゃん……！」

胸に押しつけるように抱き締めるミミに、少し苦し気な声を出すキバ。

それに気づき、ミミは『ゴメン』 っと言つと、キバを解放する。

「と、とにかく！あんまりあいつに近づくなよ……！」

「オレもキバに賛成かな……！」

「シカマル……？」

突如会話に入ってきたシカマルに驚くミミ。

「どうしてそう思ったね、シカマル？」

「……………教えんのめんどくせェ……！」

「ちょっと！はぐらかさないでよ……！」

「急にどうしたんだ、シカマルの奴……！」

シカマルの行動を不思議に思う、シカマル達の担当上忍、猿飛アスマ……。

「実はね先生！シカマルってばね……！」

アスマに耳打ちするいの。

いの言葉を聞いたアスマが少し驚いた表情になる。

「ほお…あのシカマルがねえ…」

「アスマ。いのに何吹き込まれたんだ…」

「いや、別に…」

クツクツと笑うアスマに、シカマルはため息をついた。

「ほら、次の試合が決まったみたいだぞ」

電光掲示板に示された名前を見る。

第四回戦、『ハルノ・サクラVSヤマナカ・イノ』

恋のライバル同士の激突が幕をあける…。

第14話「予選開始」(後書き)

シノの試合を抜かしてしまった…シノ好きな方、ゴメンなさい!!
新たな恋愛要素も増え、バトルシーンが続きます!
次回、サクラといのの対決!!

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9655z/>

木の葉のワンコ娘

2012年1月6日07時46分発行